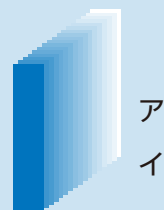




Newspaper in Education



教育に新聞を

実践報告書

2021年度



はじめに ～授業構想と教材・教具～

静岡県NIE推進協議会
会長 安倍 徹

今年度の実践報告会は、新型コロナウイルスの感染状況を踏まえ、動画配信により行われ、6校の実践指定校の教育実践が報告されました。本報告書に収められていますように、教育活動が制限される中でも、創意工夫に満ちた取り組みを展開していただき、まずもって、関係校の教職員の皆様に敬意を表し感謝を申し上げます。

さて、6校の実践報告を視聴し、改めて「授業はどのように構想されていくのだろうか」ということを考えさせられました。そして、「授業を構想するに当たっては2つの道（プロセス）があるのではないか」ということを感じました。

ひとつは、授業のフレームや学習内容がある程度決まり、「それでは、どのような教材・教具を学習内容に落としこんでいくか」というプロセスです。導入、展開、まとめのどこの場面で、どのような教材・教具をどのように登場させるのかということです。もちろん、主たる教材は教科書ではありますが、それを補ったり引き立たせたり深めたり、時には取って代わったりする教材・教具の活用について検討するプロセスです。

いまひとつは、日々の生活の中での偶然の出会いに、「これは、教材・教具として使えるのではないか」から始まる授業構想のプロセスです。それは、間近に控えている授業についてだけでなく、次学期や次学年の学習単元に関係するもの、時には既に行った授業に関係するものであるかもしれません。あるいは、どこの学習単元でどのように取り扱うかまでは具体的には分からず、漠然としながらも教員としての経験や勘による「使えるのではないか」という出会いかもしれません。

このような授業構想における教材・教具の一つとして、新聞から得られる情報や紙媒体としての新聞は心強い支援者になってくれるものと思っています。新聞には、時を経ても変わらないもの色あせないもの、時々刻々更新されるものなど多種多様な情報が散りばめられています。信頼できる情報源として、具体的な授業へのヒントをたくさんもたらしてくれるでしょう。

本報告書には、以上述べたような視点で様々な授業実践が紹介されており、各学校で教育活動を展開されるに当たり、活用していただけるものと思っています。

むすびに、本報告書の作成に当たり、御理解・御協力いただきました関係者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

目 次

- ◆「読み取る力を育む」～「全員」がいつも取り組むNIE教育～
小山町立小山中学校 鳥越 諒…………… 3

- ◆新聞の一生を見てみよう
浜松市立城北小学校 稲田 晴彦…………… 7

- ◆いつでも、どこでも、新聞がある生活
三島市立南中学校 市川 武久……………11

- ◆新聞とのかかわりを通したNIEへの取り組み
静岡市立大河内小中学校 山内 俊治……………15

- ◆生徒と社会を繋げ、学校目標「大志・共生・挑戦」の達成を目指すNIE教育
掛川市立桜が丘中学校 石神 克海……………19

- ◆NIEによる主体的・対話的な学び ～新聞を知ろう 新聞を楽しもう～
静岡県立清水特別支援学校 松原 悠馬……………24

「読み取る力を育む」

～「全員」がいつも取り組むNIE教育～

小山町立小山中学校 鳥越 諒

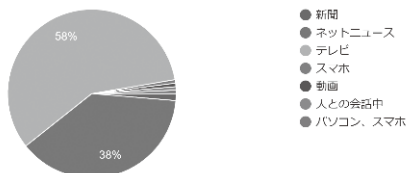
1 はじめに

(1) 本校の紹介

本校は、静岡県東部地区にあり、神奈川県との県境に位置している。各学年2学級、特別支援学級が2学級の計8学級、全校生徒205人という小規模校である。3つの小学校から集まるが、どの小学校も小規模であり、ほとんどの子供たちは幼いころから同じ環境で育ってきている。そのため、学年間の壁が比較的低く、異学年交流が活発であるという特徴がある。NIE教育に取り組む際にも、この特徴は生かされ、学校全体で足並みをそろえて活動できた。

(2) 実践にあたり

情報を得る手段として最も使っているものは何ですか？
150件の回答



本校生徒の情報処理能力や情報収集の情報源について把握するために、全校生徒を対象にアンケートを行った。グラフから、生徒は情報を得る手段として、テレビが58%、インターネットが38%と、この二つが生徒たちの主流となっている現状が分かる。NIE教育がスタートする前の段階では、新聞に触れる機会も少なく、テレビやインターネットで流れてくる情報をただうのみにしている生徒がほとんどであった。

次に、本校では、グランドデザインの中で「SDGsへの意欲的な取り組み」を掲げている。主に総合的な学習の時間を活用し、「持続可能な開発目標」への理解を深め、それぞれが未来に目を向けた課題を見つけ、それに対する行動宣言をすることを目標としている。そのために、地域や自国、世界

に目を向け、「何が起きているのか」問題意識を持つ必要があると考え、主体的にNIE教育に取り組むことで、この目標に大きく貢献できるのではと考えた。

また、新聞を使った言語活動として、様々な記事について調べ、知ったことや発見したことを伝える活動を通して情報活用能力や情報を読み解く力を身に付けたいと考えた。その結果、本校の教育目標である「主体的に粘り強く考え、課題解決する生徒」の育成を目指すことができるのではないかと考え、実践を行った。

2 実践内容

本校が行った取組は以下の通りである。教員の誰か一部に負担が集中することのないように行った。また、生徒が主体的に取り組めるように、職員は生徒を支援することを重点に行った。

- (1) NIEタイム（週に1回朝読書の時間）
- (2) SDGs × NIE（総合的な学習の時間）
- (3) NIEコーナーの設置（階段踊り場）
- (4) スピーチ（帰りの会）
- (5) 「しずおか新聞感想文コンクール」参加
- (6) 新聞記者の出前講座

(1) NIEタイム（週に1回朝読書の時間）



〈スクラップノートの記録をする様子〉

毎週水曜日に朝読書の時間を「NIEタイム」と呼び、全校生徒が新聞に触れる時間を確保した。ただ読むだけではなく、新聞記事の中から興味のある記事を切り抜き、A4サイズのスクラップノートに貼り記録を積み上げていった。新聞社名、新聞の日付を明記するよう指導し、記事の中で読み取った大事なところに線を引いたり、記事の感想を書いたりするように支援を行った。



〈生徒のスクラップノートの様子〉

始めは、興味のある記事やテレビでも大きく取り上げている記事について取り上げる生徒が多く見られた。しかし、全校でSDGsに取り組んでいることもあり、自ら環境問題やエネルギー問題に関心を持ち、記録を残す生徒が多く現れた。記事を読んだことで、「私は今後〇〇していきたい」など、持続可能な社会の実現に向けて今後の未来を見据えた意見を残すようになり、広い視野を持つことができるようになっていく様子が見られた。令和3年度入学の1年生も「SDGsって何だろう?」といったところのスタートだったが、女性の政治参画についての記事から、「5 ジェンダー平等を実現しよう」に結び付く記事を見つけたり、「これも関係があるのではないかと」、記事について関心を示したりしている生徒も見られた。

新聞によっては、SDGsのロゴマークが記載されており、生徒がを見つけやすく、気になって読むことができるため、本校の取組に非常に大きな効果を発揮することができた。

(2) SDGs × NIE (総合的な学習の時間)



〈総合学習の中の異学年交流の様子〉

NIEタイムで作成したスクラップノートをもとに、総合的な学習の時間を使い異学年交流として、全校でノートを交換し、意見の交換を行った。

自分の知らなかったことや、他の生徒の意見を読むことで、興味のあることだけを見ては気づくことが出来ない多様な情報を発見している生徒が多く見られた。

(3) NIEコーナーの設置



〈階段踊り場に設置したNIEコーナー〉

校内にNIEコーナーの設置を行った。複数紙の一面を貼り内容を比較することで、新聞によって重点的に取り上げるニュースや表現の違い等に興味を抱くことを目的とした。放課後、広報委員の協力のもと、その日の新聞各紙の一面を生徒が目にしやすい階段の踊り場に貼り、SDGsに関連した記事があればマグネットを貼るようにした。広報委員自身も記事を読みながら、「これはSDGsじゃないか?」と考え、主体的に取り組む様子が見られた。

登校時や下校時に、足を止めて読む生徒が多く

見られ、特に地域に関連した記事は高い関心をもって読んでいた。また、生徒だけでなく教職員も足を止めて記事に注目し、記事について生徒と会話を交えながら共有することができた。

生徒の振り返りからは、「家で取っている新聞の種類とまた別の新聞だと書いてあることが違って面白い」と、新聞の種類による表現の違いに関心を持っている様子が見られた。

(4) スピーチ (帰りの会)

興味のある新聞記事を切り取ってスピーチ原稿用紙に貼り、新聞の内容と、それについての自分の感想を書き、各学級朝の会や帰りの会に設けた時間に一日一人ずつスピーチを行った。順番は学級裁量とし、発表した後は、教室に掲示した。

自分自身は興味がなく見ることのない記事にも、級友が選んだ記事については真剣に聞く様子が見られた。

(5) 「しずおか新聞感想文コンクール」参加

夏休みの課題として、全校生徒が参加した。夏季休業中であっても、新聞に触れる機会を持つように、全校一斉にコンクール応募感想文を仕上げ、2学期の始業時に提出するようにした。その中から各担任で選出し、50名程度の作品を静岡新聞社に郵送した。令和2年度には、県内多数の応募の中、4名の生徒が奨励賞に選ばれた。

(6) 新聞記者の出前講座

昨年度、全校を対象に「新聞について知ること、今まで難しいと思っていた新聞への抵抗感を和らげ、新聞への興味・関心を高める」ことを目的に、「新聞読み方講座」を行った。生徒の手元に新聞が渡ると、すぐに関心のある記事を読んだり、隣の生徒と記事について話をしたりする様子が見られた。生徒の振り返りからは、「新聞記事の読み方や、新聞のよさを知ることができた」とあった。

また、今後の新聞の「在り方」についても話を伺うこともでき、情報をどのように精査していくのかを考えている生徒の様子も見られた。

(7) 授業での実践

以下の授業実践は、教師が自主的に授業に新聞記事を取り入れたものである。道徳に新聞記事を

取り入れる授業が多く見られた。



〈SNS誹謗中傷についての記事〉

上図写真の授業ではSNSの中傷被害の記事について生徒が考え、匿名であることの利点や欠点について自分の考えをまとめる様子が見られた。リアルタイムで実際に起きていることを資料として活用することで、生徒の関心はととても高いものとなった。



〈オリンピック開催についての記事〉

次の写真は、令和3年度の五輪開催の是非について、選手の意見が掲載された記事についての授業である。新型コロナウイルス感染症の拡大を危惧する声もあれば、努力してきた選手たちに活躍の舞台をあげたいなどと、様々な意見が飛び交う授業となった。ただ、「あなたの意見はありますか」と進めるのではなく、新聞記事に掲載された選手の気持ちを、活字を通して読むことで、自分の考えを深める様子が見られた。

4 成果と課題

(1) 成果

- ・これからの生活の中で地球に良い行動をしていこうと思ったこと。一人の意識や行動ではSDGsの問題解決はできないと思った。地球に住んでいる人一人一人の意識を変えて環境を守る行動、ジェンダー平等への理解、自分と違う環境にいる人への理解を深めていくことがこの問題を解決するために最低限必要なことだと思った。
- ・SDGsについて考えることができた。静岡などの再生可能エネルギーへの取り組みがなんとなく分かった。

全校生徒を対象に「NIE教育で学んだことはなにか？」を聞いたところ、SDGsに関する回答がとても多く、また細かな意見を書く生徒が多かった。本校が目的としていた「SDGsへの意欲的な取組」に対しては、非常に効果的であったと考えられる。

- ・自分はあまり政治に興味はなかったのですが新聞を読んでから少しでも知りたいと思った。
- ・日本が今どういう状況か、日本と外国の関わり、外国で起きていることがどのように日本に影響があるのか。
- ・世界での出来事、解決すべき出来事などが知れた。テレビのニュースよりも事細かに情報が書かれているので、自分の知識が増えた。

SDGsだけでなく、これまであまり気付くことができなかった、地域、社会の動きについて新たな発見をしている生徒も多く見られた。新型コロナウイルスや、オリンピック等様々なことが起きた中で、より深い真実を求めたいという探究心を育むことに大きく役立ったと実感している。

- ・テレビより詳しく書いてあるので、情報が得られる。ネットやテレビでしかニュースを見ないので、詳しいことが分かった。
- ・文字で見て、情報を得ることで記憶に残る。世界、日本のことについて知れた。それぞれの分野の新聞があることが分かった。

文字が与える情報を、映像や画像だけに頼るのではなく、自分で読み解いて、処理し活用しよう

とする意見も多く見られた。

今回のNIE教育により、地域社会を含め、国内や世界の出来事に対しての生徒の関心が高まったことを実感した。世界規模で取り組んでいるSDGsに非常に有効な点だけでなく、他教科でも自分の興味・関心・疑問をもつための、「根拠」や「背景」になりうると実感した。

たとえ短い時間でも、定期的に新聞を読む機会があることで、様々なことを知る「きっかけ」として非常に有効であることが今回の実践で分かった。

(2) 課題

課題としては、本校では半数を超える家庭が新聞を取っていないため、この実践がスタートした段階で、新聞紙を生徒人数分用意することは困難であった。実践指定校のため、毎日新聞が届くが、家庭や職員の協力がなければ、実施できなかったことである。

新聞の一生を見てみよう

浜松市立城北小学校 稲田 晴彦

1. はじめに

本校は、三方原台地の端に位置している。縄文時代の遺跡が見つかったり、古墳が残っていたりするなど、古くから長い歴史をもつ地域である。また、徳川家康が浜松にいた頃、武田信玄と三方原において合戦が起き、敗れた武士達が三方原から浜松城に逃げ帰った。その武士達が逃げ帰る時に通った所の一部が本校の学区である。そのため、かつて学区には途中で命を落としてしまった武士を弔うために、小さな塚がいくつか築かれていたようである。それらを地域の篤志家が一つにまとめた「元亀霊神」が、通学路の途中に祀られている。このように、様々な歴史を感じる事ができる地域だが、今は住宅地となり、近くには高校や大学、新しい図書館が建てられるなど文教地区となっている。

さて、本校は2019年度からNIE教育実践指定校として実践を積んできた。初年度は例年と変わらない教育課程を実践することができたが、2年目からは新型コロナウイルスの影響で、今まで当たり前だった教育活動に制限がかかってしまった。みんなで話し合う活動や、講師の方を招いて講演をしていただくことなどができなくなってしまった。そこで、今回の実践発表の内容については、1年目の4年1組での実践を中心に報告したい。また、個別に取り組んだ2年目と3年目の実践を報告したい。

2. 実践内容

(1) テーマについて

今回NIEの指定を受けてからテーマを決めるまでに一番悩んだことは、これまで数多くの学校や先生方が、様々な成果を積み上げてこられている中で、新たな実践を見つけ出せるかということであった。授業での有効活用や学校全体で取り組んだ実践、新聞を使ったイベントや遊びなど、どれも素晴らしい実践ばかりで新たな実践を見つけ出すことができなかった。

そこで改めて振り返ってみると、自分自身も幼いときから小学生新聞を読み始め、今でも毎朝新聞を読むことを楽しみにしている。ただ、新聞は読むだけではなく、野菜を保存するために包んだり、新聞が入っていた袋をゴミ入れに使ったりと様々な使い方をしている。そこで、新聞の魅力とは何かと考えたときに思い付いた実践が、総合的な学習の時間を活用して取り組んだ、「新聞の一生」である。

(2) 「新聞の始まり」記事の書き方や見方について

まずは新聞ができるまでに焦点を当てて、記事の書き方や見方について学習を始めた。子供たちの中には新聞を取っていない家庭もあるので、図書室に置いている中日新聞の「中日こどもウィークリー」に加え、静岡新聞の「週刊YOMOっと静岡」を学級文庫の棚に毎週置いて自由に読めるようにした。



すると、これまで本を読んでいた児童が、新聞を手取るようになり、少しずつ子供と新聞との距離が縮まったように感じた。そして、授業では新聞の読み方を学習するため、講師を中日新聞社員の山崎章成様に依頼して「新聞記事の書き方、見方」の学習をした。



ネット情報と新聞記事の違いを学習したり、一つの記事を例に挙げて見出しを考えたりする活動をした。ネットの記事については、チェック機能が働いていないため確かな情報が伝わらないこともあるが、新聞記事は複数でしっかり見直しチェック機能が働いているので、確かな情報が多いことを教えていただいた。子供たちは新聞記事がどのように書かれているかを理解し、さらに5W1Hを意識して、新聞記事を読み取る自信がついたようである。

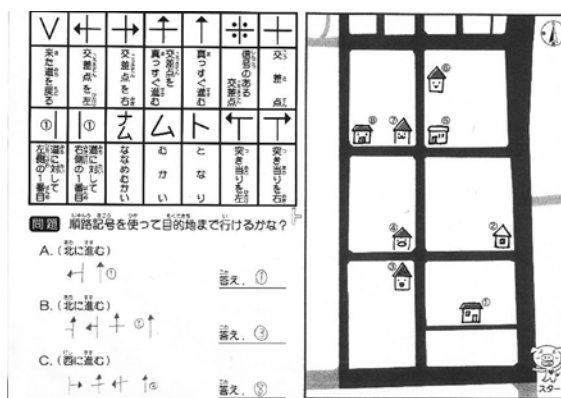
(3) 新聞配達について

次に新聞ができてから、各戸に配達されるまでのことを学習した。



講師として、本校の学校支援コーディネーターでもある清水新聞店店長清水裕人様と中日新聞記者山崎謙一様に来ていただき、印刷工場からの配送と各家への配達の話聞いた。まずは山崎様から、パワーポイントの画像と一緒に、記事ができてから印刷するまでの過程をくわしく説明していただいた。そして、清水様からは配達の仕事や配達中のエピソードを聞いた。

た。配達の方法については、普段使われている特別な順路記号を使った地図を用意していただき、子供たちはその地図を使って配達先を考えた。



見慣れない地図ではあったが、届け先が分かりやすく表現できることに気付き、配達の手間を知ることができた。質問コーナーでは、児童から「配達中に気を付けていることは何ですか」と質問が出た。清水様から配達には早朝に行われるので、交通事故には十分注意していること、また、防犯の視点を忘れずに、それぞれの家を見守ることも意識されていると説明していただいた。新聞だけを配達するのではなく、地域の防犯にも一役買っていることに気付かされた。

(4) 新聞記事の活用について

新聞の配達を学習したので、実際に新聞を授業で活用した。例えば、社会科の「くらしを守る」の学習では、新聞に掲載されていた火事の記事を取り上げ、単元の導入として利用した。また、総合的な学習の時間には、前回新聞配達で学んだ防犯の視点と関連する新聞記事を取り上げ、他の地域でも同じような実践がされていることを学んだ。

(5) 新聞の再利用について

社会科「ごみのしよりと利用」で、新聞紙が再利用されていることを学んだ。また、古紙として再利用されている以外に、どのように有効利用されているか調べた。家族にも協力していただき、新聞を活用している事例を集めた。学校では、図工の材料になったり、書写の毛筆の時に机に敷いたりするなど、様々な場面で活用されていることに気付いた。また、家庭では野菜を保存するために包んでいたり、靴を乾燥させるときに靴の中に詰めて湿気を取ったりする

などの活用法が出てきた。子供たちは、新聞は単に記事を読むだけでなく、生活の中で様々な用途に有効に活用されていることを改めて実感することができたようである。

(6) まとめ

これまで学んできた「新聞の一生」について大きな新聞（模造紙）にまとめた。ただ、ちょうどまとめの段階で新型コロナウイルスの感染拡大により休校に入ってしまった。そのため、とりあえず完成はしたが、残念ながら仕上げや見直しをする時間が無くなってしまったため、完成度が低い物になってしまった。



しかし、今回の実践を通じて新聞をより身近に感じられることができ、新聞の活用について理解が広まった。また、新聞に携わる方々のお話を聞くことができ、多くの人達の努力により新聞が届けられることに気付いたようである。

3 その他の活用

(1) 放送委員会による活用

新聞が届いていた期間中、朝の放送で放送委員が天気予報を伝えた。新聞の天気予報欄を見て、前の日の気温と当日の気温の予報を比べ、全校児童に衣服の調整などを呼びかけた。新聞によっては、地域の前日と当日の気温の変化をくわしく掲載してある紙もあり、子供たちだけで情報を読み取って活用することができた。



(2) 新聞紙を使った遊び

6年生の学年イベントで、新聞とセロファンテープだけを使って一番高い塔を作るゲームを行った。子供たちは最初、折りたたんだりくしゃくしゃにしたりして高さを出そうとしていたが、そのうち丸めて強度を出すことに気づき、工夫しながら高さを出していった。班の仲間と協力しながら作業を進めていく姿が見られた。ゲームが終わった後は、セロファンテープと新聞をきれいに分別し、セロファンテープはゴミ袋に、残った新聞紙はきれいにたたんで資源物回収に出せるようにした。塔を作成する時間よりも、片付けの方が時間がかかってしまった。

(3) 新聞紙を使った清掃

6年生が大そうじをするときに、新聞紙を活用して清掃を行った。6年間お世話になった校舎を清掃することになり、子供たちが掃除の仕方をネットで検索すると、新聞紙を使った窓ふきが見つかった。早速学校に届いていた新聞紙を使って清掃をしてみると、想像以上に汚れが落ちた。手軽に掃除ができ、好評であった。



(4) 新聞広告を使った産地調べ

5年生が「わたしたちの生活と食料生産」の学習で、我が国の食料生産の現状を把握するために、新聞広告を使って産地調べを行った。広告から産地を読み取っていくと、それぞれの地域の特色をつかむことができた。北海道産の農作物が多いことと、輸送の関係で静岡県産が多いことに気付いた。また、それぞれの地域の特性を生かして農作物が作られていることも読み取ることができた。



(5) オリ・パラと関連した取組

6年生のボランティアを募って、オリ・パラの記事を集めた。本校は、2019年から「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」に参加していて、これまでにボッチャや車いす、ブラインドサッカーの体験をしたり、オリ・パラコーナーを作成して資料を展示したりしてきた。そこで、今回の取組のまとめとして、オリ・パラ期間中の新聞から関連記事を見つけて切り抜き、それぞれパネルにまとめた。6年生からボランティアを募って活動に取り組み、子供たちはオリ・パラをより身近に感じる事ができたようである。新聞記事は、まず見出しで関連記事を見つけることができ、文章を読めば大体がつかめるので、パネルにまとめやすかったようである。



4 まとめ

(1) 成果

今回の実践では、少しでも子供たちに新聞を身近に感じてもらうことをねらいとしてきた。新聞は単なる情報収集の一つの手段だけではなく、人々の生活と深い結びつきがあることに気付かせたかった。実践を振り返ってみると、新聞と関わる方々に直接話を聞いたり、新聞を活用した体験をしたりすることができた。そのため、子供たちと少し距離があった新聞が、身近なものになったと感じる。

また、新聞がいつもより種類が多く届いたため先生方の新聞への意識も高まり、様々な実践が行われた。今回紹介しきれなかったが、授業の中で活用したり、資料として活用したりしていただいた。新聞は教材の一つとして重要な物であると改めて感じた。



(2) 課題

今回の実践で、新聞の効果的な活用や新聞を身近に感じる事について追究することはできなかったが、子供たちが自ら新聞を手にとって活用しようとするまでは到達できなかったと思う。「家でも新聞を読みたい」とまで身近に感じられるように、今後も新聞を使った実践を積み重ねていきたいと思う。そのためには、より効果的で、新聞の魅力を感じられる活用を追究し続けていきたい。

いつでも、どこでも、新聞がある生活

三島市立南中学校 市川 武久

1. はじめに

近年、ICTが急激に進み、子どもたちは端末からいつでもどこでも情報を入手できる。当校の生徒は、令和3年2月、三島市から全生徒にタブレット型PCが配付され、学校内では授業や諸活動で使用し、家庭にも持ち帰って学習活動に使用している。また、各家庭における新聞の購読率は、保護者の年齢が下がるにつれて下落し、30歳代の保護者のほとんどはスマートフォンから情報を得ている。

しかしながら、端末からの情報を新聞代わりにすると、情報は過多のうえ、表示される順位も人気順位や検索回数順になっているため、生徒はどれが重要な情報で、また、どれを信用してよいのかわからず、情報の選択能力、活用能力、情報モラルの習得が必要になっている。

そこで、新聞の特徴である、①54.6cm×40.6cmの中に人の目の動きを考えた構成で記事が配置されている、②記者によって取材された信頼性のある内容である、③要約されたわかりやすい文章である、という三点を、授業を中心にした学校教育活動の中で利用すれば、生徒に真の情報リテラシーが身に付くものと考え、主題を「いつでも、どこでも、新聞がある生活」に設定し、研究することにした。

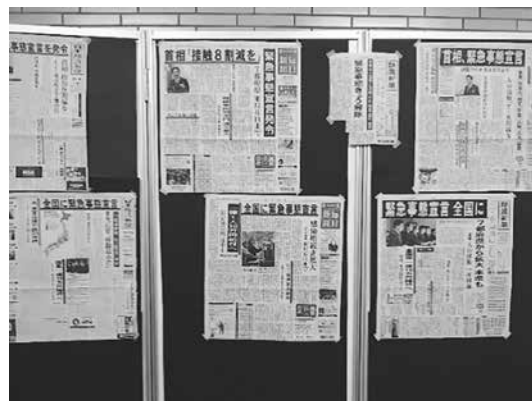
2. 実践の概要

(1) 新聞を効果的に掲示

1年目の前期、NIEのおかげで、毎日約5社の新聞が届くので、これらから目に付く記事を切り取って掲示した。これは、新聞になじみのない生徒が、記事の目の留め方、記事が決して一つの四角形の中に収まっていないことに気づくようにするためである。



1年目の後期、いくつかの記事が組み合わせられた記事を枠ごと、切り取って掲示した。これは、前期で養った記事の文字を追う力をさらに向上させて、次の記事に目を移すことができるようにするためである。



2年目は、新聞をそのまま、校舎2階のソファ、3階の書架、4階の机、全教室の教卓に平置きした。これは、これまで養ってきた新聞を見る力を発揮できるようにするためである。

(2) 静岡新聞社から講師招聘

静岡新聞社から講師を迎え、2年生全員に「新聞の作り方」を教授していただいた。

大見出しの作り方、横書きと縦書きの違い、記事の構成の仕方など、読み手の立場になって新聞を作ることが肝要である。



社会科や総合学習で新聞を編集する際、今回の受講で得た知識と技能は大きな礎になった。



(3) 国語

ア 2年国語：地方紙と全国紙を比較

2年生の国語の授業で、東京オリンピックのボランティアの辞退者について、地方紙（静岡新聞）と全国紙（読売新聞）に記載されている文章を比較した。これは、生徒が事実一つであっても、記者の書き方によって、読み手の印象が違うことに気づくためである。また、地方紙と全国紙の書き方の違いに、背景が影響していることにも気づくようにした。

この活動によって、生徒は、静岡新聞は単に辞退者1万人を掲載していたのに対し、読売新聞は専門家の意見も掲載していることを見いだした。そして、読者として受ける印象の違いについて、静岡新聞の場合は、辞退者1万人が多いか少ないかの判断は読者に任されているのに対し、読売新聞の場合は、専門家の意見が感染拡大を懸念する内容なので、読者は辞退者1万人の原因と結びつけて考えざるを得ない状況に追い込まれてしまい、最初からオリンピックの開催は反対を表に出しているような表現であったという考えをまとめることができた。



イ 3年国語：新聞の記事を要約

3年生の国語の授業で、新聞記事を読み込み、その内容を分析して要点を抜き出し、さらに要約して相手に伝えるという活動をした。これは、生徒が自分の考えをまとめる際、要領を得ない文章であったり、要点がまとまっていない話し方であったりしていたためである。

この活動によって、生徒はまず、記者が読者に伝えたいコアを抜き出し、それを強調するための形容詞を見いだした。また、時間、場所、状況に関係する以外の内容を削除し、骨子だけを組み立ててから、取っておいたコアを挿入して要約文を作ることができた。生徒は、記者が作った文章が、最初からいかに要約されたものであったか、また、取材をしながら作文する能力に驚かされた。



(4) 社会

ア 2年社会：九州地方を収集

2年生の社会科の地理分野で九州地方を扱った際に、新聞記事から関係する記事を切り出し、九州の自然環境について学んだ。これは、当時、九州地方が豪雨によって被害がもたらされ、各社が報道していたため、火山灰と水害を学ぶタイムリーな教材であった。

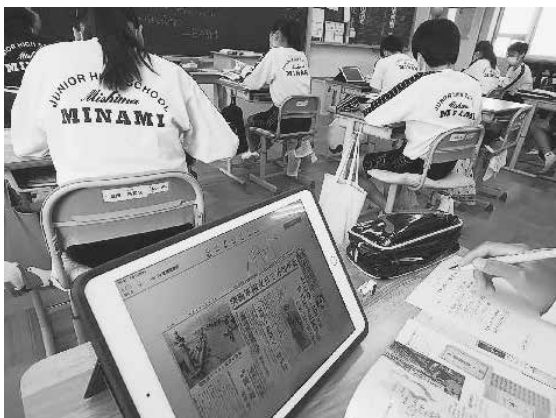
この活動によって、生徒は、内容は同じであっても、見出しがそれぞれ違い、読み手を引き込むテクニックがあることを実感した。また、各社のたくさんの事実に基づいた記事を読むことで、九州地方の崩れやすく浸み込み易い土質、入り組んだ海岸線と多くの島々、黒潮が衝突する海流、台風の通り道などを、教科書に照らし合わせながら学ぶことができた。



イ 3年社会：戦前の記事を活用

3年生社会の授業の歴史分野で日中戦争の新聞記事をデータ化し、生徒一人一人に配布してある端末上で取り上げた。これは、新聞記事がどんな時代であっても、世論に多大な影響を与えるツールであることを生徒が理解するためである。

この活動によって、生徒は新聞が事実と違うことを掲載すると、世論が傾いてしまうことを知った。また、改めて新聞力の強さを知るとともに、雑誌とは違って社会に責任ある行動を取る義務があること、偏った思想の影響を受けてはいけないことを学んだ。そして、何よりも当時の戦争の記事から、戦争を全否定していない表現に21世紀の現代との価値観の違いを感じることができた。



(5) その他の教科

ア 1年数学：統計単元で活用

1年生数学の授業の統計単元で、各社の新聞からいろいろな用途で使われている様々なグラフを抽出した。これは、統計で学んだ棒グラフや円グラフが、実際に新聞ではどのようなデータを読者に伝えるときに、どのグラフを使っているのかを調べるためである。

この活動によって、生徒は、新型コロナの毎日の件数を比較させるときは棒グラフ、経済状態の状況を種類別にあらわすときは円グラフ、これまでの死亡者の人数を知らせるときには累積グラフを使っていることを実感することができた。



イ 3年英語：英語新聞を翻訳

3年生の英語の授業で、NIEで提供された英語新聞 [Japn News] を教材に翻訳作業を行った。

これは、授業で学んだ文体が、実際の新聞ではどのように使われているのかを確認するとともに、生徒自らが英語力を試すためでもある。

この活動によって、生徒は、実際の新聞では文体が様々で、強調したい内容を文頭にもってきて、その後、that や then などを使って続けるなど、不規則であることを知ることができた。また、3年生までに習った単語がたくさんあり、知らない単語も分解すれば予想がつくことを実感した。



3. 成果と課題

ア 成果

冒頭に示した新聞の3つの特徴を、授業を中心にした学校教育活動の中で利用することによって、生徒には情報リテラシーを身に付け、日常生活の中で主題の「いつでも、どこでも、新聞がある生活」が実現した。

生徒には、廊下の掲示板に新聞の特ダネを掲示すれば、興味深く、正しく文字を追って閲覧する習慣が身についてきた。



また、全教室に毎日、静岡新聞を配布するようになったので、休み時間になると教卓に生徒が集まり、地方紙ならではの情報を、しっかりとした見識で、その日のニュースを閲覧するようになった。



さらに、オープンスペースのソファには生徒が集まり、新聞の社説について自分の意見を主張すると、他の生徒が意見を述べて価値観の違いを楽しむ光景が見られるようになった。



イ 課題

1人1端末と新聞の関係を対立させるのではなく、端末の長所（早い、見やすい、投稿できる）と、新聞の長所（強調したい記事、一面にいくつか情報を表示）を融合させていきたい。



新聞とのかかわりを通したNIEへの取り組み

静岡市立大河内小中学校 山内 俊治

1. はじめに

本校は、静岡市の市街地から自動車でも40分ほど北上した山間にある小学校と中学校が統合した小中一貫校である。中学部の職員が小学部に教科担任として授業に行き、児童・生徒の成長を9年間で捉えやすい環境にある。小学部に13人、中学部に6人の計19人の児童・生徒が在学している。

2. 本校の実態

本校では、令和2年度から「人・もの・こととのかかわり深まる授業」を研修のテーマとして取り組んでいる。NIEに取り組むにあたって、新聞を「もの」の1つと位置付けることとした。その際に、「NIE＝新聞ありき」ではなく、あくまでも様々なツールの選択肢のうちの1つとして新聞を捉えるようにすることを共通認識としてもった。

また、本校の児童・生徒の家庭では多くの家で新聞を購読しておらず（購読中：中学部5世帯中1世帯、小学部8世帯中4世帯）、「家で新聞を読む」という児童・生徒はほとんどいない状態であった。

3. 実践内容

(1) 学校全体としての取り組み

資料1のように基本的な新聞の置き場所を中学部が朝の会や帰りの会を全学年そろって行っていた共有スペースに設定し、誰でも自由に新聞とかかわれる環境を整えた。特定のクラスではなく共有スペースに設置することで、いつでも、誰でも新聞とかかわることができる考えた。基本的には学校で購読している静岡新聞に加え、送られてくる新聞の当日分と前日分を新聞社ごとに分け、新聞ラックに保管した。また、その月の新聞も新聞社ごとにまとめ、NIEコーナーに設置し、閲覧できるようにした。

壁には資料2のように新聞のスクラップコーナーを作り、担当教員が作成した掲示物を掲示した。主に、児童・生徒の関心がありそうな内容や学校行事とかかわりの深い内容のものを扱い、関心を引くようにした。



(資料1) 中学部共通スペースのNIEコーナー



(資料2) 担当教員の作成した掲示物

また、前の月までの新聞は新聞社ごとにまとめ、別室にアーカイブとして保管し、こちらも同様にいつでも閲覧可能な状態にすることで、過去の新聞であっても利用しやすいようにした。

その他にも小中それぞれの職員室前などの掲示板には、学校で紹介された新聞記事を掲示することで、自然と新聞に目が行くような環境作りを行い、少しでも新聞を身近なものとして感じ、かかわれるような工夫を学校全体として心がけた。

(2) 中学部での実践

①週に1回程度のNIEの時間



毎週水曜日に朝の活動として、各自NIEコーナーから新聞を持ってきて、自分の興味・関心のある記事を読むようにした。読んだ記事の要約や感想を記録し、ストックすることで、後で振り返ることも可能なようにした。始めた当初は、1面の記事やスポーツ欄の記事のように、元々興味があるものや目につきやすいもの、新聞以外のメディアでも大きく取り上げられているものから選ぶ様子が見られた。そこで、教師側から記事を指定したり、コメントを入れて他の記事への関心をもたせる活動を行ったりすることで選ぶ記事に変化が見られるようになった。

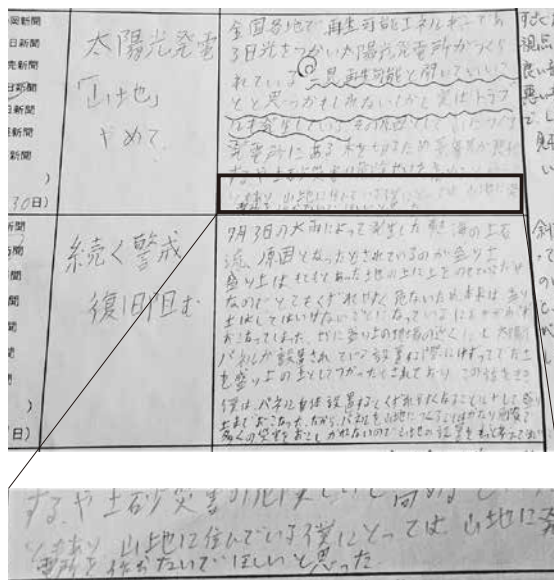
社	気になった記事	感想・意見
朝日新聞	菅野新築地は 27	菅野の新築地は、菅野の中心地から少し離れたところにあり、環境が良く、交通も便利だ。また、学校も近いので、子育てしやすいと思う。
朝日新聞	大谷いさみ 16/1/10	大谷いさみさんの記事は、菅野の歴史や文化について詳しく書かれていて、とても興味深い。菅野の魅力を改めて知ることができた。

(資料3) 令和3年2～3月の生徒の記録用紙

資料3の生徒は外部活動として、野球に参加していることもあり、野球の記事を多く選んでいた。また感想も「すごいと思った」や「楽しみです」といったもので、内容に触れるようなものではなかった。

しかし、半年ほど継続していくことで選ぶ新聞記事の内容に変化が見られるようになった。資料4は資料3と同じ生徒の記録であるが、令和3年の6～7月にかけて書いたものである。それまでは好きなものについての記事を読むことが中心だったが、熱海の土砂災害に関心をもち、関連する新聞記事を継続的に読むという変化が見られた。また、感想の中にも「山地に住む僕にとっては」といった自分の身に置き換えた姿が見られるようになった。

ち、関連する新聞記事を継続的に読むという変化が見られた。また、感想の中にも「山地に住む僕にとっては」といった自分の身に置き換えた姿が見られるようになった。



(資料4) 令和3年6年～7月の生徒の記録用紙

②授業での新聞の活用

実践例 I

「見出しから受ける印象の差について」

(中学3年社会科)

この実践では、見出しの印象によって自分が受ける印象や行動の変化を考えることを目的とした。

同時期に届いた3社の新聞の内閣支持率の差を見て、同じものごとを扱っているのに新聞社ごとに違いがあることを提示した。「他の見出しでも差が出るのだろうか」という疑問に対して、県知事選挙と衆議院議員選挙の事前の予想や世論調査についての見出しを見せた。すると、「〇〇氏有利」や「△△党議席減」といった見出しを見ることで、一種の「強迫観念」のようなものを感じ、自分の投票行動に変化が出そうであるという意見が出た。新聞から受ける影響を感じているところで、自分たちが見ていたものは「記事」ではなく「見出し」であることや「公約」や「政策」でないことを確認した。自分たちが選挙とかかわるときに、本来判断の基準になるはずの「公約」や「政策」を見ずに投票行動を決めていいのか、考えるきっかけとなった。

実践例Ⅱ

「企業の社会的責任と実際の取り組み」

(中学3年社会科)

この実践ではコロナ禍で工場見学ができない状況での企業側の取り組みについて考えた。

資料5の新聞記事の前半部分を参考に、コロナ禍での企業側の取り組みを学習した。



(資料5) 令和3年12月7日 静岡新聞記事

企業が商品であるプラモデルを一人1個配布し、授業をリモートで行っていると言うことを知り、そのことによる企業側の利益を考えた。そのうえで出た答えが「宣伝効果」であった。そこで、改めて同じ新聞記事の後半部分を読んでいくと「SDG sの普及」や「投資家の期待」、「企業の社会的責任」といった語句が出てきた。そういった活動を通して、現代社会において企業側の利益追求だけではない社会貢献への活動について理解することにつながった。

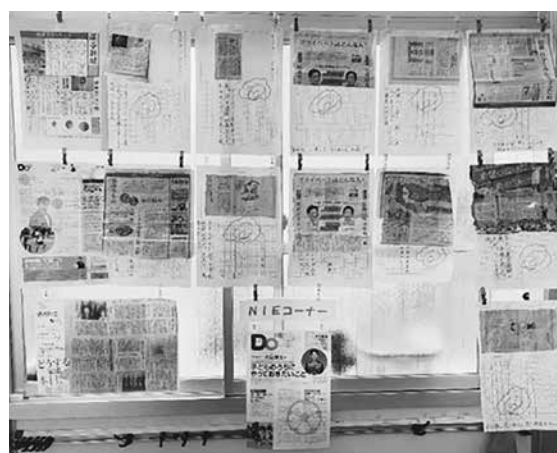
これら2つの実践では、『新聞が毎日発行されていて、最新の情報が掲載されている』という特徴を有効活用できた事例と考える。今起きていることと自分たちとのかかわりを考えるときに新聞を使うことの有用性を確認できた。

(3) 小学部での実践

①新聞に親しむための取り組み

小学部では、新聞のほとんどが中学部に置かれていたため、「YOMOっと静岡」や「朝日小学生新聞デジタル for school」を活用した。特に新聞への親しみが少ない小学生は、クイズコーナーやマンガなどを導入とすることで親しみを持ち、新聞とかかわれるようになった。中学部と同じように、朝の活動の時間に

「YOMOっと静岡」などの記事を読み、気になったものの感想を書くことを通して、アウトプットする時間も取るようにした。新聞記事を切り取り、スクラップしたものは資料6のように小学部の教室のNIEコーナーに掲示し、誰でも見られるようになっている。また、朝日小学生新聞デジタル for school も同様に朝の時間に活用する場面が多かった。どちらも自分が興味をもった記事を中心に活動を行っていたが、デジタル端末を使った活動では、興味をもった記事からさらに関連した記事へと飛ぶことで興味の幅を広げ、様々な社会的事象にかかわるきっかけ作りになったと感じる。



(資料6) 小学部のNIEコーナー

②授業での新聞の活用

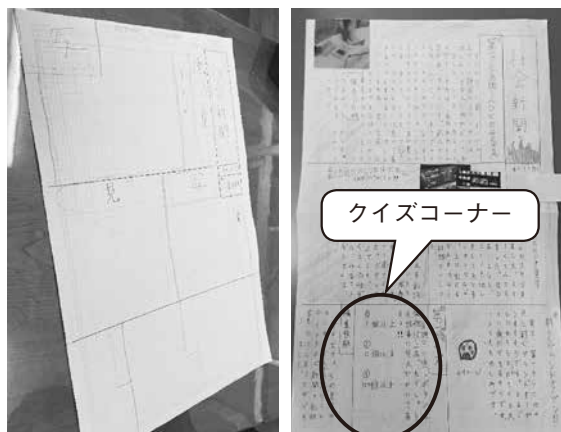
実践例

「複数教科にまたがった新聞の学習」

(小学5年国語科・社会科)

国語科の「新聞を読もう」の単元で学習したことを生かして、社会科見学の内容を新聞にまとめる活動を行った。国語科の授業では、新聞の構成について学んでおり、「見出し」や「リード文」、新聞の構成の工夫について学習した。社会科での新聞の制作の場面では、その学習内容を生かし、「何を書くのか」より先に「どのように書くのか」を考えるとところから始めた。その中で児童の口から「写真があった方が良い」や「この量ならリード文はいらないのではないか」といった言葉が生まれた。また、社会科の中で学習した情報を発信するテレビ局や新聞社が心がけている「分かりやすく、正確に」を意識し、書きたい内容と構成を考えることで資料7のような下書きを作った。見出しの位置や写

真の位置を実際の新聞と見比べることで見やすさや分かりやすさについて考えることにつながった。



(資料7) 児童の書いた新聞の下書きと清書

さらに、記事を書くときに児童から「クイズコーナーを作りたい」という声が挙がった。そのコーナーには、「YOMOっと静岡」にあったクイズの答えは記事を読めばわかるような工夫を取り入れた。わかりやすいものや興味をもちやすいものを作る工夫をすることで低学年にも読んでもらいやすくなると思ったようであった。小学部の実践①で紹介したように、自分自身が新聞にかかわるきっかけとなった経験を生かし、自分が作る新聞に取り入れることができた。ここまでの小学部での実践の集大成となるような活動になったと考える。

4. 成果と課題

(1) 成果

全体的な成果として、大きかったのは新聞や活字への親しみが増えたことがあげられる。小学部、中学部どちらでも行った朝の時間に新聞を読む活動では、定期的に新聞と触れ合うことができた。冒頭でも書いたように新聞の購読率が低い本校の児童・生徒にとっては貴重な時間になったと言える。特に中学部ではNIEの時間に一人1部ずつ新聞を手に取り、読むことができたことが大きかったと感じる。一人1部ずつ新聞を手にとることができたのは本校のような小規模校ならでは新聞とのかかわり方だったのではないかと思う。取り組みを始めた頃は、感想を書いた後に時間が余ると手持ち無沙汰に

なってしまう、ただ座っているだけになってしまっていた生徒も、次第に余った時間に別の記事を読むようになっていくといった変化が見られた。その結果、実践例でもあげたような興味の幅の広がりや感想を自分に置き換え、自分の視点で社会とかかわろうとするきっかけにつながったと感じる。

(2) 課題

2年間の活動を通して大きな課題として感じていることは、新聞に親しむことができるようになったものの、決められた時間以外に新聞を読む姿がほとんど見られなかったことである。新聞は読むことができるものにはなっているが、読みたいものにはならなかったと感じる。「新聞を読む」という行為は自主的に行うものにまでなっていないのが本校の現状である。また、複数の新聞社の新聞が届くという貴重な経験を十分に生かすことができなかったことも課題だと考える。中学部での実践例Ⅰのように、複数の新聞社を見比べる活動を何度か行い、同じ出来事であっても捉え方や書き方に違いが出ることに気づくことはできてきた。しかし、興味をもった出来事を扱う記事を見比べようという活動にはならなかった。自主的な活動を促すような取り組みをもっと考え、提案していく必要があったと考える。

2年間のNIEの実践を通して、子どもたちのなかに「新聞を読み、社会のことを知る」こと以外に「活字とかかわる力」と「思いや考えを書く力」がついてきたと感じる。今後は子どもたちの興味関心の幅を増やししながら、今ついてきた力を伸ばしていけるように、様々な人やもの、ことにかかわりをもたせ、思いを伝えられるような活動につなげていきたい。

生徒と社会を繋げ、 学校目標「**大志・共生・挑戦**」の 達成を目指すNIE教育

掛川市立桜が丘中学校 石神 克海

はじめに

掛川市立桜が丘中学校は掛川市の西北に位置し、校区には静岡県総合教育センター「あすなろ」がある。2021年度の全校生徒は423人の活発な部活動が自慢の学校である。校舎の前庭には「夢の庭」と呼ばれる花壇があり、四季折々の花が咲き誇っている。現在は掛川市学園化構想のもと、保幼小中が連携し、地域と一体となった教育を推進している。

研究の背景

2019年12月に、経済協力開発機構（OECD）が2018年に行ったPISA（学習到達度調査）で、日本の読解力の平均点と順位が顕著に低下しており、加盟国中11位に沈んだとの報道がなされた。当時本校においても、定期テストにおいて、問題文で問われていることが理解できない生徒が一定数以上いるなど、読解力の不足は、国語のみならず全教科における喫緊の課題と考えられていた。また、2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、社会全体が行動制限を強いられた。その中で中学生も家で過ごす機会が増え、スマートフォンやタブレット端末から情報を得る機会が増えた。そうした状況の中で、情報を取捨選択し、正しく受け取る力を育成する必要性を感じていた。

指定1年目の取り組み

「情報を正しく読み、選択する能力の育成」

(1) NIEコーナーの設置

各学年の廊下に複数人が集まって新聞を閲覧するコーナー（資料1）を設置した。11月からは7社の新聞が提供されたため各階のNIEコーナーに2社以上の新聞を設置。新聞による論調の違いなどを読み比べられるようにした。3年生のフロアにはベンチも設置したので、3

年生が昼休み等に、気軽な雰囲気ですれ違ひながら新聞を開く姿も見られた。



資料1 NIEコーナー

(2) 桜が丘中新聞コーナーの設置

本校教頭から「自分たちのことが記事になればみんな読むよ。」と助言をもらった。そして、本校の教育活動の中で特徴的なものについては積極的に報道提供をしたため、2020年度から20回程度新聞に生徒の活動が取り上げられた。取り上げられた記事は1階職員玄関付近に桜が丘中新聞コーナー（資料2）を作り掲示したり、教室掲示にしたりした。すると生徒たちは自分事としてとらえ、大変関心をもって記事を読んできた。



資料2 桜が丘中新聞コーナー

(3) 「新聞から学ぼう」（読解力向上学習）の実施 生徒に新聞記事を読ませ、同時に読解力を向

上させることを目的として、毎週木曜日の朝活動の時間に「新聞から学ぼう」（読解力向上学習）の時間を設け、ワークシート（資料3）を実施した。このワークシートはできる限り、前の週の新鮮な新聞記事を使って作成した。新聞記事は大人向けの文章で書かれているため、中学生にとって内容を正しく読み取るのは容易ではなかった。そこで正しく新聞記事の内容を読み取らせるためのガイドとして、問題を設け、読み取りの助けとした。設問は重要キーワードを抜き出させたり、筆者の主張として正しいものを選択肢から選ばせるといったごく簡単なものにした。しかし、開始当初はその設問にも正しく解答できない生徒が数多くおり、本校生徒の読解力の低さを感じた。ところが、年度末にはほとんどの生徒が設問に正しく解答できるようになり、新聞のような混成型テキストを繰り返し読むことで読解力の伸長が図られるという本校の立てた仮説が正しかったことが証明された。

その成果は現3年生が行った全国学力・学習状況調査の結果にも表れていた。全国学力・学習状況調査の国語においては「読むことに関する問題」が4問出題され、全国の正答率が48.5%、県の正答率が49.3%だったのに対して、本校の正答率は53.8%と、全国を5ポイント、県を4ポイント上回るものであった。これは現3年生が2年次に読解力向上学習を続けてきた成果が顕著に顕れたものと考えている。

新聞から学ぼう

記事を読んで問いに答えましょう。

①あなたはこれまでに「節分の日」にどのようなことをしたことがありますか？

唐揚げを食べ
豆を投げ回す...

②今年の節分は毎月何日でしたか？

2月 23

③なぜ節分の日が替わるのでしょうか？

公転の周期が2年、月周の周期が1年だから。地球の公転周期が2年、月周の周期が1年だから。

④節分の日とはどのようなことを書いて行われるようになったのでしょうか？

疫魔を払い、豊作を祈る。

豆まきやおなじみの節分の日が、今年は例年より1日早い2月2日になる。1869年以降、124年ぶりという珍しさだ。国立天文台は「地球が太陽の周りを回る公転の周期が、1年きっかりではないことが原因。微妙なずれが積み重なった結果だ」と説明する。

節分は季節を分けるという意味があり、立春の前日に当たる。立春を含む節分が2月3日から3月3日まで。2023年は2月2日、2024年は2月3日、2025年は2月2日、2026年は2月3日、2027年は2月2日、2028年は2月3日。

むすこ節分は、太陽と地球の公転関係から天文台が日付を割り出し毎年、公表している。公転周期が365日ぴったりではないことが影響して、立春が前後する。これにより節分の日も2月3日から2月2日が出てくる。今年からしばらくは4年ごとに2月2日となり、2027年の次は2031年となる。

資料3 新聞から学ぼうワークシート

(4) 授業における新聞の活用

1年目は研究の主眼を「生徒が新聞になれる」ことに置くことにした一方で、2年目の研究においては授業に軸足を移すことが決まっていたため、その準備として教科によっては少しずつ授業に新聞を取り入れることを始めた。また、2020年度、コロナによる一斉休校から明けた5月27日に行った全校道徳では「コロナ差別をなくそう」をテーマに全学級担任がコロナ差別を扱った新聞記事を用いて授業（資料4）を行った。

道徳科指導案

指導者

1 日 時 令和2年 5月 27日(水曜日) 第3時

2 学級・場所 各学級・各教室

3 題材名 学校再開に伴うコロナ差別防止のための新聞記事の活用

(1) 本時のねらい
学校再開に合わせ、感染症やコロナ差別防止のメカニズムを理解することで、発熱者等に対する偏見や差別をしようとする心根を乗り越え、他者を思いやって生活していこうとする道徳的心根を養う。(22 よりよく生きる喜び)

(2) 授業構成

時	活動の動き掛け・予想される生徒の反応	支援や留意点
5分	●本校中、新聞を読んでいるこんな記事が多く見られました。今日はみんなとこの記事を読んで考えたいと思います ●コロナによる差別の新聞記事が裏面に印刷された4種類のワークシートを各組に配布して読ませ、感想を交流する ・差別だ・ひどい ・なんでこんな心ないことするのだろう	④4種類の新聞記事の内容に共通している「差別」というキーワードを生徒から引き出し、中心発問につなげる 記事A：病院スタッフ乗車拒否記事B：海外ナンバー車に差 記事C：感染者の家に投石や辱骂 記事D：トラック運転手の子ども学校でまず自宅待機確保
10分	なぜ、コロナのことでこの人たちは差別をしたのだろう(問い①) ・自分も感染したくないからだ ・少しでもリスクを減らして安心したい気持ちになるんだ ・自分の家族だけは守りたい ・緊急事態なのに他のことよりも自分だけは生き延びたいという気持ちになるから	⑤PowerPoint 2ページを提示(以下PPTと略す) ⑥PPT 3ページから11ページの内容の説明を行う
40分	●日本赤十字から出ている「新型コロナウイルスの感染」のスライドを見て、コロナ差別が起るメカニズムを学ぼう ワクチンがない、薬がないという不安、恐れが起こる ⇒不安が生き延びようという人間の本能を刺激する ⇒ウイルス感染に関わる人や対象を日常生活から遠ざけたり、差別したりということが起こる ・ということは誰にでも起こりうるということだ ・気を付けなくては ●1F発熱者待機ルームの写真を提示。発熱者、調子が悪い生徒が迎え待機、待機する部屋で、休校期間中に職員が準備したことを話す	⑦PPT 2ページを提示
まよめる5分	●発熱者が出た時、あなたはどうに生活するか(問い②) ・軽い気持ちで「あいつコロナだ」とか絶対に言わない ・ソーシャルディスタンスを厳格に守る。心は今までもどおり友達のことを心配するのがいいと思う ●教師の脱話 「心配なことがあったらいつでも相談のいで」と投げかける 「仮が丘中学校で行われている新しい生活様式を紹介し、休校期間に離れても心の距離を縮めたい」と伝える	⑧偏見をもち、差別をしてしまう心根を乗り越え、他者を思いやって生活していこうとする道徳的心根を養われるか(脱話・ワークシート) ⑨PPT 2ページを提示

コロナ差別に関する新聞記事を活用し、NIE活動のスタートに位置づける

資料4 コロナ差別をなくそう 道徳科指導案

指定2年目の取り組み

生徒と社会を繋げ、
学校目標「大志・共生・挑戦」の
達成を目指すNIE教育

私たちは過去のNIE指定校の実践記録に目を通す中で、これまでの実践が、国語・社会・道徳・総合的な学習の時間といった特定の教科に偏っていたことに気づいた。しかし、本当の意味でNIE教育を浸透させ、生徒と社会を繋ぐものにするためには、特定の教科のみの実践では不十分だと考え、本校では全教科において新聞を使った授業実践を行い、10月の発表では、なるべく多くの教

科の授業を公開することを確認した。また、ここではNIEを用いた授業づくりについて、必ずしも授業で新聞そのものを用いる必要のないこと、教師が新聞から得た情報や価値観を授業の中に落とし込めれば、それでもよいことも共通理解した。

5月には理科教諭の私が提案授業を行いNIE授業のひとつのモデルを示した。私の授業では花粉を通して虫媒花と風媒花を学ぶ授業を行い、その導入で新聞記事を活用した。しかし、生徒の興味を引くという点では有効だったものの、新聞を活用することによって授業そのものが深まることはなかった。

そして、6月16日静西教育事務所指導訪問。ここでは音楽、数学の中心授業をはじめ、全職員の授業を公開し、すべての授業で新聞を活用したNIE授業をするよう要請した。

しかし、この公開によって新聞を活用する上での二つの問題点が明らかになった。一点目は公開されたほぼすべての授業で、新聞が導入場面に用いられたことである。二点目は新聞を活用する目的で単元の終わりのトピック的な教材を使って、差し込みの授業を行った職員が何人かいたことだった。

一つ目の新聞の導入場面での活用が多かったことについては、導入で新聞記事を用いること自体、生徒の関心を高めるために有益なのでよいが、生徒の情報活用能力を育て、「生きる力」を身に付けさせるツールとして新聞を生かすには、授業の追究場面、問題解決場面で効果的に活用できないかと考えた。また、二点目については新聞を使わなければならないから使いやすい教材を選ぶという発想は、新聞を使うことそのものが目的となってしまうしており、NIE本来のねらいからはずれたものであると考えた。本校ではこの二つの問題点について研修推進委員会を開き、議論を重ねた。そして、軌道修正を図るとともに、6月に全職員で二つのことを共通理解した。

- ①授業の中の追究場面・問題解決場面で積極的に新聞を活用し、情報活用能力の伸長を図ろう。
- ②単元の中のどこで新聞を活用するのが有効か考えて単元を構想し、単元のいずれかの場面で、新聞を用いて課題解決にあたる授業を設定しよう。

私たちはこの2点を意識して実践することができなければ授業の中に新聞のある風景が自然にな

らないと考え、実践を積み重ねた。

10月27日NIE公開授業。特定の教科を絞らず、8教科を公開した（各教科の実践は次頁を参照）。参観していただいた方々から「新聞を用いることで実際の社会で起きたことをリアルに感じ、生徒にとって学習問題がより切実感のある思考や議論につながったのではないかと感じました。」や「普段から新聞の記事に目を通すことで、教科の学びを生活につなげることができると思いました。生徒だけでなく、教師も新聞に目を通すことが大切であると思いました。」というお褒めの言葉をいただいた。しかし、感想の中から「導入場面で使うことが多くなると思います。授業内で活用するというのは難しいと思いました。」という言葉もいただいた。

終わりに

2年目の取り組み「全教科でのNIE授業」を通して、職員全体で教材研究を進めながら学習指導案を完成させることができた。これまでの小規模な活用ではなく、単元全体を見通した中での効果的な新聞活用がなされた授業、新聞を用いてじっくりと追究する生徒の姿が見られた。新聞を用いた授業の可能性を広げることができたと考える。

一方で、「全教科でのNIE授業」に挑戦した中で、各教科の特色と新聞記事の活用方法の相性に関して課題を感じた。じっくりと時間をかけて教材研究を進めてきたが、教科によっては本当にその活用方法が適切であったのかという疑問が残った。例えば、国語でうまくいった方法が、音楽でうまくいくとは限らない。音楽など、実践例が少ない教科に関しては、適切な方法が見つからない。それぞれの教科に、どのような活用方法が合うのかについては、今後深く研究を進めていく必要があると感じた。

公開授業指導案

国語科学習指導案

指導者 中島 光

1 学級・場所 第3学年1組 ・ 2階 3年1組教室
 2 単元名 報道文を比較して読もう 【(2)情報の扱いに関する事項I】
 3 本時の指導 (6/6)

(1) 本時の目標
 報道文を比較して読み、気づいたことを交流する活動を通して、どちらの報道文が紙面に掲載する記事としてふさわしいか、根拠を明確にして選ぶことができる。【読むこと(1)ウ】

(2) 新聞の活用方法とねらい
 同日付の2社(静岡新聞、中日新聞)の新聞を班ごとに配付し、同じ内容を扱った記事と比較して読ませる。その際、事実の取り上げ方や語句の選び方などに着目して読ませることで、書き手の違いや事実の解釈によって表現が異なることに気づかせたい。

(3) 授業構想

	●授業者の働きかけ ・予想される生徒の反応	※支援 ◎留意点 評価 ☆新聞の使用
つかひ	●各版でどんな記事を取り上げましたか。 ・パラリンピックの○○選手を取り上げた記事 ・新型コロナウイルスのワクチン接種の記事	☆各版で取り上げた記事について確認する。 ※事前に各版の選んだ新聞記事を配付しておき、読ませておく。
追究する	各版の発表から得た情報を再構築し、それを根拠にどちらの記事を採用するか決めよう。 ●1班から順に、「見出し」「リード文」「内容」「写真・図表」の観点から2つの記事比べ、気づいたことを発表しよう。 ・私たちの班では、○○月○日の○○についての記事を比較して読みました。まず、静岡新聞では見出しに「○○」という言葉が使われており、読み手に○○のような印象を与えています。いっぽう中日新聞の見出しには、「△△」という言葉が使われており、読み手に○○のような印象を与えています。	◎発表は1班5分以内で行う。班員で「見出し」「リード文」「内容」「写真・図表」担当者を決め、自分の分担所について気づいたことや考えたことを発表させる。 ◎聞き手は各版の発表を聞き、ポイントになる部分をメモしておく。 ※記事や発表内容を捉えられていない生徒には、かみくだいた説明をし、考えを整理できるようにする。 ◎聞き手には、発表が終わるごとに、どちらの記事を採用するか評価させる。(個人検討2分、グループで検討3分)
まとめ	●他の班の意見をふまえて、改めて自分たちの担当した記事を読みましよう。どちらの記事を採用し、紙面に掲載しますか。 ・1班は静岡新聞の記事を採用したいと思います。 理由は～・・・。 ・2班は中日新聞の記事を採用したいと思います。 理由～・・・。	◎根拠を明確にして採用理由を述べさせる。 報道文を比較して読み、気づいたことを交流する活動を通して、どちらの報道文が紙面に掲載する記事として選ぶことができたら、根拠を明確にして選ぶことができたら、(ワークシート、話し合い観察)

社会科学習指導案

指導者 清垣 聡

1 学級・場所 第3学年2組 ・ 2階 3年2組教室
 2 単元名 民主政治と政治参加 【公民分野C(2)イ】
 3 本時の指導 (2/5)

(1) 本時の目標
 御前崎市の産廃処理施設の建設問題について、新聞の読み取りと話し合いを通して、住民としてとるべき具体的方策を考え説明できる。【思考力、判断力、表現力等】

(2) 新聞の活用方法とねらい
 直接請求権が認められていることを、実例として確認させ、地域は住民自身によって地域運営されていることに気付かせたい。

(3) 授業構想

	●授業者の働きかけ ・予想される生徒の反応	※支援 ◎留意点 評価 ☆新聞の使用
つかひ	●前時に提示した問題を確認する。 ・住民は、反対している人が多いみたいだな。 ・自分も住民だったら反対するな。 ・住民はどのように対応すればいいのかな。 ・自分の地域に産廃処理施設があったら嫌だな。	◎どのような問題だったかをパワーポイントで提示する。 ◎授業の流れをパワーポイントで提示し、見直しをもてるようにする。
追究する	住民の意見が反映されるためにはどうすればいいのか。 ●クロストークの班になって、他の地域では、どのように課題を解決しているのか伝えよう。 ・A: 解職請求(鹿児島県) ・ B: 条例の制定(東京都) ・ D: 条例の制定(静岡県) ・ C: 解職請求(東京都) ●「産廃処理施設の建設」について、住民はどのような対応をすればいいか考えよう。 ・首長をやめさせればいいんじゃない。けど、別の首長が建設するかも。 ・建設しないような条例をつくればどうかな。 ・監査請求はこの課題には当てはまらないかもね。	☆地方自治体に直接請求を請求した実例を提示する。 ◎新聞のできごとと、直接請求権とはどのようなものがあるのか説明するように指示を出す。 ◎新聞のできごとと、直接請求権について説明が終わった班から、産廃処理施設の建設の問題について住民がどのように対応すればいいか話し合うように指示を出す。
まとめ	●各グループの発表を聞いて、課題に対する自分の考えを書こう。 ●各グループの発表を聞いて、課題に対する自分の考えを書こう。 住民の身近な生活に関わることなので、条例の制定の請求をすればいいと思う。産廃処理施設を建設できないような条例を制定していけば住民の意見が反映されると思う。 ●産廃処理施設の建設の新聞記事を提示する。 ・条例を作ったのか ・住民には直接請求権というのが認められているんだな。	住民としてとるべき具体的方策を考え説明できるか。(ワークシート) ☆御前崎の産廃処理施設の建設問題を扱った記事を発表し、条例の制定を請求したことを確認する。

数学科学習指導案

指導者 川中 瑞貴

1 学級・場所 第2学年1組 ・ 3階 2年1組教室
 2 単元名 データの分析 【D(1)データの分布】
 3 本時の指導 (4/4)

(1) 本時の目標 (4/4)
 静岡県の一日あたりの新型コロナウイルス新規感染者数を月ごとにまとめた箱ひげ図と新聞記事から読み取れる世の中の出来事から、感染者数の変化の要因を考察する活動を通して、箱ひげ図の特徴や新聞記事等を根拠として批判的に考察し、それらを論理的に説明できる。【思考力、判断力、表現力等】

(2) 新聞の活用方法とねらい
 新型コロナウイルス新規感染者数の変化の様子と関連性がありそうな世の中の出来事をリストアップするために新聞記事を活用する。新規感染者数のデータを、現実の出来事と合わせて見ることによって、データをより細部まで、より批判的に考察し、多角的な分析ができると考えられる。また、日常生活で目にする様々な出来事について、その事象をグラフで表すと、数学的に考察し、それらを評価する態度を養いたい。

(3) 授業構想

	●授業者の働きかけ ・予想される生徒の反応	※支援 ◎留意点 評価 ☆新聞の使用
つかひ	●2つの箱ひげ図(令和2年10月・11月の新型コロナウイルス新規感染者数を月別にまとめた箱ひげ図)は何を表現したのだろうか。 ・一日あたりの新型コロナウイルス新規感染者数 ●2つの箱ひげ図は形が大きく異なる。新規感染者数の急激な変化を反映している。 ・こんなに急激な変化をしているのはなぜだろうか。	◎大画面テレビに箱ひげ図を提示する。 ◎初めは、両のデータを並べているのを伝えてみる。 ◎2つの箱ひげ図をGoogle Classroomで配付する。
追究する	新規感染者数が急激に変化した要因は何だろうか。 ●箱ひげ図の特徴や世の中の出来事などを根拠として論理的に分析していきましょう。 ・11月の箱ひげ図の位置を見ると、10月に比べ、全体的に大きく変化しているから、急激に増加していると考えられる。また、最大値が第3四分位値から大きく離れているため、突発的に急増したタイミングがありそうだ。 ・当時、「GoToキャンペーン」をやっていた。それが感染者数の増加に影響を及ぼしたという新聞記事がある。 ●これは、令和2年10月～令和3年9月まで(1年間)の新型コロナウイルス新規感染者数を月別にまとめた箱ひげ図です。 ・変化の仕方によって見えてくる。 ・オリンピックなど、規模の大きい出来事があったら新規感染者数が急増しているように見える。	◎小集団で追究。 ※「自習パソコン web サイト」を用いて、新型コロナウイルス新規感染者数の変化に関連性がありそうな世の中の出来事を探る。 ◎「GoTo キャンペーン」が増加の要因であるという記事と、要因ではないという記事の両方を紹介する。生徒に自分の考え、根拠を正しいかどうかという批判的な考察を促す。 ◎同時にこの考えをまとめさせる。 ◎1年間の箱ひげ図をGoogle Classroomで配付する。
まとめ	●箱ひげ図に加えて、複数の箱ひげ図(1年間の)を用いて、新規感染者数の変化の要因について考えよう。 ・変化の仕方によって見えてくる。 ・減少と増加は、世の中の出来事に関係ありそうだ。 ・長期休暇(夏休み、年末年始、ゴールデンウィークなど)の後に増加しているように見える。 ・オリンピックなど、規模の大きい出来事があったら新規感染者数が急増しているように見える。 ●新聞記事から、2つの箱ひげ図(10月・11月の)の新規感染者数急増の要因について、個人で考えをまとめよう。 ・規模の大きい出来事のある月ほど、新規感染者数が大きく分布する箱ひげ図になっているから、この時期に行った「GoTo キャンペーン」(変化の要因)だと考えられる。 ・季節や月によって変化の様子に規則性がありそうだから、政府の活動が必ずしも新規感染者数の変化の要因になっているとは限らない。 ・増加と減少を繰り返している。今後の変化の様子を予想できそうだ。 ・箱ひげ図の特徴や新聞記事等を根拠として分析することで、データと世の中の出来事とを関連させて、論理的に考えることができた。 ・複数のデータや記事を用いることで、より信頼できる論理的な結論が導き出せそうだ。 ●今後の新規感染者数の変化を予想してみよう。 ・変化の傾向から考えると、実行から増加するかもしれない。 ・ワクチン接種が進んでいるという新聞記事があるから、その影響で減少に向かうかもしれない。	◎小集団で追究。 ※「自習パソコン web サイト」を用いて、新型コロナウイルス新規感染者数の変化に関連性がありそうな世の中の出来事を探る。 ◎ヒストグラム(月ごと)を紹介し、それぞれの表し方と向きをさせ、今後、様々な事象に対して、選択しながら考察できるようにする。 ◎感染者数の変化の要因を、箱ひげ図の特徴や新聞記事等を根拠として批判的に考察し、それらを論理的に説明できる。(ワークシート)

理科学習指導案

指導者 石神 克海

1 学級・場所 第1学年4組 ・ 1階 第2理科教室
 2 単元名 テレプロンプターの仕組み 【第1分野(1)(ア)②】
 3 本時の指導 (1/4)

(1) 本時の目標
 テレプロンプターのモデルを使って出た疑問や問題を見つけ共有する活動を通して、話し合いによって得られた傾向から単元で明らかにすべき課題を設定している。【思考力、判断力、表現力等】

(2) 新聞の活用方法とねらい
 本物のテレプロンプターを使うことに加えて、菅義偉元首相が実際に使用していることを取り上げた新聞記事を紹介して単元の導入を行う。テレプロンプターが実際に使われている場面を知ることによって、普段馴染みがない機器に興味をもちやすくなることや、学習内容が実生活で生きていると感じることをねらう。

(3) 授業構想

	●授業者の働きかけ ・予想される生徒の反応	※支援 ◎留意点 評価 ☆新聞の使用
つかひ	●菅元首相は記者会見でテレプロンプターを導入し、メッセージがより伝わるようになりました。そのことが書かれている新聞記事を読んでもよい。 ・手元の原稿を見ずに話すことができるようになった。 ・透明な板に文字が見えるってすごいね。 ・板に映った文字は記者から見えないのかな。	☆菅義偉元首相がテレプロンプターを使用していることを取り上げた新聞記事を紹介して、単元の導入を行う。
追究する	●ミニテレプロンプターをつくってみて疑問や不思議に思ったことを班で共有しよう。 ・話し手は原稿が見ながら聞き手の方に目をつけることができるな。 ・アクル板の角度によって見える時と見えない時があるぞ。 疑問や不思議を解決する課題を設定しよう。	◎あえて適切な角度に調整しない装置を配布し、生徒たちの手で調整する機会を設けることでアクル板には適切な角度があることに気づくようにする。 ◎個人学習では疑問や不思議を付箋に書かせる。机ごと小集団の話し合いでは、付箋を種類ごと分類し、課題設定の材料とする。 ※話し合いが活発ではない班に対して、疑問を提示し、話し合いの手掛かりを与える。 ※話し合いが停滞している班には他の班に意見を聞きに行ることができ「情報収集の時間」を設ける。
まとめ	●これからの学習で解き明かしていく課題を整理しよう。 課題① 透明な板に反射する光の道筋を調べよう。 課題② 光が反射するときの角度の規則性を調べよう。 課題③ 斜めになっている透明な板を真っすぐ進む光について調べよう。	話し合いによって得られた傾向から単元で明らかにすべき課題を設定しているか。(ノート・発言)

英語科学習指導案

指導者 井渡 貴斗

1 学級・場所 第2学年4組・2階 2年4組教室
2 単元名 Unit 6 Research Your Topic 【話すこと（発表）イ】
3 本時の指導（4/7）

(1) 本時の目標
ニュース作りに必要な情報を集める活動を通して、新聞記事に関して他人がどんな意見をもっているかを英語でやり取りで尋ねることができる。
【話すこと（やりとり）イ】
【思考力、判断力、表現力等】

(2) 新聞の活用方法とねらい
新聞から得た日常的话题に関して、簡単な英語で概要を伝えたり、その出来事やニュースについて他人の意見を聞いたりする活動を行う。相手に話題の概要を英語だけで説明するのは難易度が高いため、新聞を説明の際の視覚的補助とし、内容の理解を促した。

(3) 授業構想

授業者の働きかけ	予想される生徒の反応	※支援 ①留意点	※評価 ②留意点	☆新聞の使用
●Let's interview people in our city as a TV reporter and get information to make good news! ・前回の授業までで自分の記事についての説明はできそうだし、その記事に関連して質問したいこともある。 ・良いニュースを作るためには、一般人の人も欲しいから、たくさん質問して情報を集めたいな。 ●How can you start your interview? 例：I read a newspaper article about Ken Shimura. He was a famous comedian. He died because of coronavirus. By the way, who is your favorite comedian?	●4人組で活動をする。2人はインタビューになって調査をする。残りの2人は一般人として別のグループのインタビューに答える。 ①インタビューのうち1人はiPadを持ち、カメラマンとしてインタビューの様子を撮影する。 ②記事の内容を伝えたと、相手に質問をするという流れを確認する。 ③教師の手本で、イメージをもたせる。	☆新聞記事を見せながら相手に説明することで、視覚的にも新聞の内容の理解を促す。 ①よりよいニュースを作るためには、より多くの具体的な意見が必要であることを押さえておく。 ②まず同じグループ（4人組）内でインタビューする際、される側に分かれて練習する。その後、教師の合図で指定したローテーションに従って相手を変えてインタビューする。 ※相手も指定することで、自ら話すのが苦手な生徒も出るようになる。 ※質問や選択肢は口頭だけでなく、プリントを見せておわりやすくする。	③新聞記事を見せながら相手に説明することで、視覚的にも新聞の内容の理解を促す。 ①よりよいニュースを作るためには、より多くの具体的な意見が必要であることを押さえておく。 ②まず同じグループ（4人組）内でインタビューする際、される側に分かれて練習する。その後、教師の合図で指定したローテーションに従って相手を変えてインタビューする。 ※相手も指定することで、自ら話すのが苦手な生徒も出るようになる。 ※質問や選択肢は口頭だけでなく、プリントを見せておわりやすくする。	☆新聞記事を見せながら相手に説明することで、視覚的にも新聞の内容の理解を促す。 ①よりよいニュースを作るためには、より多くの具体的な意見が必要であることを押さえておく。 ②まず同じグループ（4人組）内でインタビューする際、される側に分かれて練習する。その後、教師の合図で指定したローテーションに従って相手を変えてインタビューする。 ※相手も指定することで、自ら話すのが苦手な生徒も出るようになる。 ※質問や選択肢は口頭だけでなく、プリントを見せておわりやすくする。

保健体育科学習指導案

指導者 伊藤 拓史

1 学級・場所 第1学年5組・4階 1年5組教室
2 単元名 生活習慣と健康 体養・睡眠と健康 【健康な生活と疾病の予防（1）ア（4）】
3 本時の指導（5/6）

(1) 本時の目標
体養・睡眠が健康にもたらす効果について理解し、問題の根拠を見つけ、アドバイスを求める活動を通して、自分の生活と比較したり、関係を見つけたりして改善方法を見つけることができる。
【思考力、判断力、表現力等】

(2) 新聞の活用方法とねらい
伊藤君の睡眠の問題点についてアドバイスのために、新聞記事から根拠を探す。

(3) 授業構想

授業者の働きかけ	予想される生徒の反応	※支援 ①留意点	※評価 ②留意点	☆新聞の使用
●休業・睡眠の効果はなんだろう。 ・骨や筋肉の成長、記憶の定着・整理。 ・ストレスの解消。 ●3週間後のテストに向けて、自分の睡眠を見直してこいこう。	●伊藤君の睡眠はどんな問題があるだろう。 ・少ない睡眠時間①、仮眠②、寝だめ③ ●なぜそれぞれの睡眠は体に良くないだろう。 ①：ストレスを軽減してくれるコルチゾールは6時間以降に最も出るから、6時間は寝たい。 ②：長すぎる仮眠は体内時計が狂ってしまう。 ③：寝だめは体内時計を狂わせ、時差ぼけ状態になり体調に影響を及ぼしてしまう。	●1週間の振り返り、問題点を見つけよう。 ・平日は部活や塾、スマホで寝る時間が足りない。 ・仮眠が長すぎる。・休日寝過ぎている。 ●理想的睡眠モデルを考えよう。 ・平日、休日とも7時間以上睡眠。 ・夕方の仮眠をなくす。・休日に寝過ぎない。	③3週間後に控えたテストに向けて、睡眠の観点から考える。 ④エラーモデルを提示して全体で問題を共有する。 ⑤値一小集団全体（ホワイトボード）※「睡眠時間」「仮眠」「寝だめ」の記事や資料を根拠にアドバイスを求める。 ⑥生活習慣一体系体内時計に伝える。 ※睡眠時間と仮眠の両方を調整する。 ⑦「睡眠時間」「仮眠」「寝だめ」の観点で問題点を見つける。 ⑧平日、休日によって条件をつけて考える。 ※睡眠時間と仮眠の両方を調整する。 ⑨値一小集団（共有・質問） ⑩理想的睡眠モデルをもとにテストまでの睡眠の記録をとる。（3週間）	☆新聞記事を見せながら相手に説明することで、視覚的にも新聞の内容の理解を促す。 ①よりよいニュースを作るためには、より多くの具体的な意見が必要であることを押さえておく。 ②まず同じグループ（4人組）内でインタビューする際、される側に分かれて練習する。その後、教師の合図で指定したローテーションに従って相手を変えてインタビューする。 ※相手も指定することで、自ら話すのが苦手な生徒も出るようになる。 ※質問や選択肢は口頭だけでなく、プリントを見せておわりやすくする。

技術・家庭科（技術分野）学習指導案

指導者 柴田 伊織

1 学級・場所 第2学年3組・2階 パソコン室
2 題材名 これからの発電について考える【C エネルギー変換の技術（1）アイ】
3 本時の指導（3/6）

(1) 本時の目標
各発電方法の特徴について新聞記事からプラス面とマイナス面を探し、技術の見方・考え方を軸として多面的に比較する活動を通して、根拠をもって各発電方法を考えることができる。
【知識及び技能】

(2) 新聞の活用方法とねらい
インターネット上には多くの情報があり、正しく信頼性の高い情報もある一方、個人の主観や悪意のある情報も多く存在する。今回は各発電のプラス面やマイナス面について、他人に説明する根拠として新聞を活用していく。

(3) 授業構想

授業者の働きかけ	予想される生徒の反応	※支援 ①留意点	※評価 ②留意点	☆新聞の使用
●前回学習した発電方法を思い出してみよう。 ・太陽光発電以外は手回し発電みたいにモーターを回すよね。 ●日本における発電のナンバー1はなんだろう。 ・火力発電だよ。・意外と太陽光だったりして・・・ ●火力発電が100%じゃないの。 ・きっとそれぞれにメリット面があるからだよ。	●各発電について画像を表示する。 ※火力発電の比率データを提示する。	☆新聞記事から、「安全性」「環境への負荷」「経済性」の3つの視点で分類分けをしてまとめさせる。 ※エキスパート学習として、それぞれの発電方法を2グループに分けて、1人3分程度で複数の新聞記事から必要な情報を集める。最後に情報を共有して戻ったときに意見を伝えられるようにする。 ③共有の時間をとり、全員が根拠をもって説明できるようにする。	③各発電について画像を表示する。 ※火力発電の比率データを提示する。	☆新聞記事を見せながら相手に説明することで、視覚的にも新聞の内容の理解を促す。 ①よりよいニュースを作るためには、より多くの具体的な意見が必要であることを押さえておく。 ②まず同じグループ（4人組）内でインタビューする際、される側に分かれて練習する。その後、教師の合図で指定したローテーションに従って相手を変えてインタビューする。 ※相手も指定することで、自ら話すのが苦手な生徒も出るようになる。 ※質問や選択肢は口頭だけでなく、プリントを見せておわりやすくする。

道徳科学習指導案

指導者 清水 直哉

1 学級・場所 第1学年2組・4階 1年2組教室
2 主題名 差別や偏見のない社会の実現に向けて 内容目標C-（1）公益、公平、公正
3 教材名 「差別や偏見 生き抜く」(令和3年8月11日水曜日 参事 新聞特別号)
4 本時の指導

(1) 本時のねらい
新聞記事から和子さんが受けた差別や偏見を認識し、差別や偏見をなくすためにどうすればよいかを考え、自分の考えを説明することを通して、差別や偏見のない社会について考える力を育む。

(2) 新聞の活用方法とねらい
新聞記事は差別や偏見をなくすという考えを伝えるのに役立つ。また、本時で読む新聞は、現在社会にある差別や偏見に対する意識付けを行う。また、本時で読む新聞は、差別や偏見をなくすという考えを伝えるのに役立つ。また、本時で読む新聞は、差別や偏見をなくすという考えを伝えるのに役立つ。また、本時で読む新聞は、差別や偏見をなくすという考えを伝えるのに役立つ。

(3) 授業構想

授業者の働きかけ	予想される生徒の反応	※支援 ①留意点	※評価 ②留意点	☆新聞の使用
●アンケート結果を見てみよう。 ・みんな差別された経験があるんだ。 ・予断や偏見にはならないかな。	●どうすれば、差別や偏見のない社会になるだろう。 ・自分の身の回りから見てみると、差別や偏見は本当にないか。 ・自分の周りの友達や家族を見てみると、差別や偏見は本当にないか。 ・自分の周りの友達や家族を見てみると、差別や偏見は本当にないか。 ・自分の周りの友達や家族を見てみると、差別や偏見は本当にないか。 ・自分の周りの友達や家族を見てみると、差別や偏見は本当にないか。	☆新聞記事から、「安全性」「環境への負荷」「経済性」の3つの視点で分類分けをしてまとめさせる。 ※エキスパート学習として、それぞれの発電方法を2グループに分けて、1人3分程度で複数の新聞記事から必要な情報を集める。最後に情報を共有して戻ったときに意見を伝えられるようにする。 ③共有の時間をとり、全員が根拠をもって説明できるようにする。	③各発電について画像を表示する。 ※火力発電の比率データを提示する。	☆新聞記事を見せながら相手に説明することで、視覚的にも新聞の内容の理解を促す。 ①よりよいニュースを作るためには、より多くの具体的な意見が必要であることを押さえておく。 ②まず同じグループ（4人組）内でインタビューする際、される側に分かれて練習する。その後、教師の合図で指定したローテーションに従って相手を変えてインタビューする。 ※相手も指定することで、自ら話すのが苦手な生徒も出るようになる。 ※質問や選択肢は口頭だけでなく、プリントを見せておわりやすくする。

NIEによる主体的・対話的な学び

～新聞を知ろう 新聞を楽しもう～

静岡県立清水特別支援学校 松原 悠馬

はじめに

(1) 学校概要 (知的障害特別支援学校)

静岡県立清水特別支援学校は、知的障害特別支援学校である。全校生徒数は、252名(小学部95名、中学部50名、高等部107名 R4.1/7現在)であり、12年間のつながりをもって学んでいる。『ともにあゆみ、ともにかがやく』～児童生徒一人一人が夢を持って可能性を伸ばし、地域で自分らしく生きることをみんなで支援する～という教育目標のもと、社会的自立を目指している。



(2) 本校の児童・生徒の実態について

本校の児童・生徒は、知的障害を有している。論理的思考、問題解決、計画、抽象的思考、判断、学校や経験での学習のように一般的な精神機能の支障がある。また、自閉症やADHDなど児童生徒個々に様々な障害を有し、そのような集団で学習を行っている。児童生徒の障害特性に関わる学習上・生活上の困難(つまづき)の例として、複雑な事柄や文章・会話の理解、日常生活上の計算、自分の置かれている状況や抽象的な表現の理解、未経験の出来事や急な状況の変化への対応が難しいなどが挙げられる。本校児童生徒のあらわれとして、全体指示が自分事として捉えにくく個別指示が必要となることや「こういう」を「こおゆう」といった音声で認識し表記が誤っていること、その場に合っ

た声の大きさを調整することが難しいこと、相手の状況を捉えられず一方的に話をしてしまったり話をしている人の前を横切ったりすることなどがある。障害特性上、生活経験が少なく自ら気づき行動を調整することが難しい。一方で非常に素直で真面目な生徒が多く、目的や方法が理解できた事柄については、素直に行動できたり、根気よく続けたりすることができる。また一度覚えたことは良くも悪くも決まったやり方を替えずに反復することができる。

知的障害を有する児童生徒に対しては実際的な生活経験が不足しているがゆえに、抽象的な学習よりも实际的・具体的な指導内容が求められ、教科横断的な指導により、授業内容は焦点化・視覚化し、個々の実態に応じた個別支援を行っている。

1. 学校としての取り組み

(1) 実践の目的

本校の児童生徒は、情報を収集する方法も限られ、社会で起きた想像しにくい事柄について興味関心が低い。また、得た情報を収集・活用する力も乏しいことから、『新聞に対する興味関心をもち、情報収集や活用する力を身に付け、主体的に情報を取捨選択し、互いに学び合う学習や生活に生かすことができる』をテーマに実践を行った。

(2) 学校全体としての取り組み内容

本校の環境や生徒の実態を踏まえて、主に高等部の特定グループの生徒をターゲットとして授業実践を行った。

1年目は、高等部内で新聞のある環境の中で様々な場面で新聞を取り上げ、新聞に親しむことを目標に取り組んだ。2年目には、情報収集や活用を目指した授業実践に取り組んだ。全学部教員を対象とした公開授業を行い、各学部生

徒を対象とした時にどのような取り組みが考えられるか、今後実践してみたいことを考える機会を設け、アンケート調査を行った。

2. 実践事例

(1) 高等部生徒アンケート調査 (R1年度)

新聞に関する実態把握のためにアンケート調査を実施した。(全94名中54名回答)

1. 家で新聞を購読していますか
ある 25名 / ない 28名 / 未記入 1
2. (1) 新聞を読んだことがありますか
ある 40名 / ない 14名
(2) (1) であると答えた人に聞きます
学校の新聞をどれくらい見ますか
毎日 4% / 週に2~3回 21%
週に1回 30% / 見ない 45%
3. 新聞が好きですか
好き 14% / 興味がある 38% / 嫌い 48%
4. どんな記事に興味がありますか(複数回答可)
社会問題 17 経済 3 国際問題 5
スポーツ 15 番組 25 4コマ漫画 9
地域のニュース 17 読者の投稿記事 0
コラムや社説 2 芸能 11 写真 1
5. 情報を収集するために使っているものは何ですか(複数回答可)
新聞 10 インターネット 33 テレビ 41
ラジオ 5 家族や友達 13
また、「文章だけだと読もうと思えない」「記事を読んでも内容が分からない」「漢字が読めない」など、新聞を読もうという興味関心が湧かない、新聞を読んでも分からないという感想が多く聞かれた。

(2) 実践事例

<1年目>

・新聞置き場所と整理の方法

高等部廊下に新聞コーナーを常設し、いつでも手に取ることができる環境を作った。2か所に各新聞を配置し、様々な新聞に触れられるようにした。限られたスペースの中で多くの新聞を見ることができるよう、過去1週間の新聞をまとめてファイル形式で綴じて置くようにした。また、休み時間等にゆっくり新聞を読むこともできるよう、新聞コーナー近くに椅子を配置したり、教員のおすすめ記事を紹介する付箋

を貼ったりした。

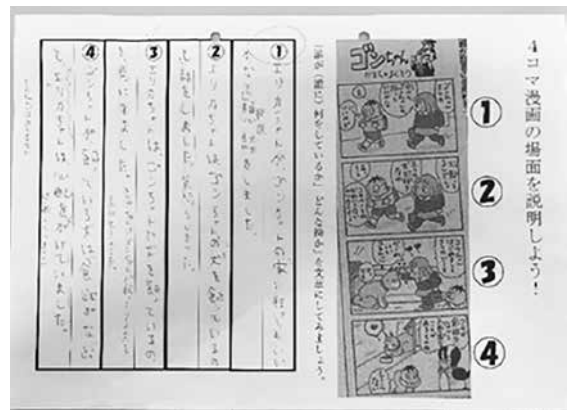


・新聞づくり

好きな内容の記事を選択し、5W1Hで情報を整理し、新聞を作成する活動に取り組んだ。

・4コマ漫画を使用した場面の読み取り

アンケート調査より、文字のみでは苦手意識が高いため、生徒が興味をもって取り組める活動として4コマ漫画の場面を読み取り文章化する課題に取り組んだ。内容の読み取りや助詞の使い方、正しい漢字の表記など取り組む中で生徒それぞれの課題が明確になり、生徒も教師も課題を意識して取り組むことができた。



・HRでの今日のニュース発表

朝のHR等で日直当番がその日にあったニュースを紹介した。それぞれの興味関心で紹介をするため、自分が気にならなかったニュースを知ることができたり、テレビで知ったニュースに関する新聞記事を読んだりする

姿が見られた。

・HRでの記事紹介（教員）

投稿記事から同世代が感じていることについて紹介をした。様々な人の気持ちを知ることができたり、それを基に生徒の気持ちを聞くことができたりした。継続していくことで生徒の話聞く姿勢が自然と身に付くなどの様子も見られた。

・ダイベート

生活に関する題材（新型コロナウイルスや修学旅行など）を活用し、根拠をもって相手に伝えることを目的としてダイベートに取り組んだ。社会情勢を踏まえて、修学旅行の行き先は県内か県外（沖縄）かを考えた。県内と沖縄の状況や経済についてなど考えるためのキーワードを提示し、新聞記事だけでなくインターネットを活用し情報を収集した。身近な話題を取り上げたことで、課題に関心を持ち、主体的に学習に臨むことができた。そのため、『どのような情報があれば相手は納得するだろう』『相手はどう反論してくるだろう』『どのような情報が必要だろう』『相手の反論に何と返そう』といった生徒の思考により自然と対話が生まれた。



<2年目>

・スクラップブック作り

情報の収集、活用を目指し新聞づくりの発展として、スクラップブック作りに取り組んだ。それぞれが新聞記事から好きなテーマを決めて、スクラップ



ブックに切り抜いた記事を貼ったり、内容を短い文章にまとめて書いたり見やすいように色付けしたりしてまとめた。新聞づくりとは異なり、1つの記事を要約するのではなく、複数の記事を時系列で並べたり、つながりを見つけて感想を書いたりすることができる生徒もいた。

・SDGsの学習（ニュースと身近な生活をつなげる）

ニュースと自分の生活が関わっていること、自分はどのように行動するのかを考える学習に取り組んだ。SDGsを取り上げ、①SDGsを知る、②SDGsに関わる出来事を新聞記事から探す、③探した記事の内容を整理し、カテゴライズする、④まとめたことから自分にできることを考えるという流れで学習した。分からないことは自分で調べたり、仲間と相談したりすることで、記事を要約することができたり、はじめに気付かなかった関連する目標に気付くことができた。また、仲間と相談することで、「エネルギー問題が温暖化を引き起こし、気候変動につながる」と一つひとつの問題を関連付けることができた（図1）。そこで世の中の出来事を自分に置き換え、自分にできることはなんだろうと考え、啓発ポスター（図2）にまとめることができた。難しい課題であるため苦戦する生徒は多かったものの、仲間と相談すれば解決できるという経験をするすることができた。

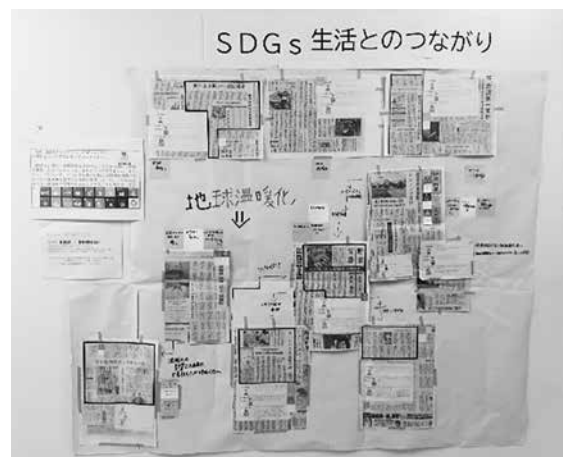


図1

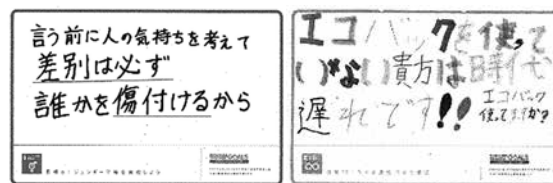


図2

(3) 校内授業公開

全学部を対象に校内で授業公開を行い、以下の3つの視点で参観してもらい、今後の新聞活用が充実したものとなるよう、新聞活用の有効性や今後どのような学習で取り扱うことができ

るかについてアンケート調査を行った。

- ・新聞記事の活用は有効だったか
- ・より良い活用方法や有効な支援について
- ・各学部で取り組むことができそうな新聞の活用方法について

アンケート集計結果（一部抜粋）

Q：新聞の活用は有効だったか

- A：記事を見つけたり、友達と話し合うようになったりする姿は新聞に親しみ続けた結果だと思う。
- ・記事の理解が難しい生徒に理解できている生徒が説明するなど、コミュニケーションが取れている。
 - ・その人なりの新聞との出会いや付き合い方を知り、これから活用するきっかけになったのではないか。
 - ・分からないことや気になったことを自分から調べようとする姿が見られた。

Q：より良い活用方法や有効な支援

- A：（今回はSDGs 17目標を扱ったが）取り扱う内容や記事を精選したことにより生徒の思考が深まる授業だった。
- ・より身近な問題を取り扱う。
 - ・難しい記事についてはこども新聞等、もう少し簡単に説明されたものを一緒に合わせて読むと読み取りがスムーズになる。

Q：各学部で取り組むことができそうな活用方法について

<小学部>

- ・好きな写真を貼ってスクラップする
- ・高学年では、4コマ漫画など記事以外のところから触れて新聞を知ることから。
- ・まず写真から。動物園や季節の移ろいなど身近な記事を貼り出す。

<中学部>

- ・中学部では、新聞記事から情報を読み取ることができる生徒に限られるため、活用するなら写真。
- ・好きなスポーツの試合結果を集める。
- ・『中学部新聞を作ろう（生活単元学習）』という授業を考えると新聞の特徴を見て、気付き

（写真が必要、字がきれいだ、インタビューしているなど）、作成することができそう。

- ・新聞社への社会科見学

<高等部>

- ・HRで1面記事を取り上げる。
 - ・天気予報欄から予定黒板に記入する、HRでアナウンスする、気温等のグラフの学習に活用する
 - ・「大自在」や「紙弾」、「声」などの書き写し、要約等
 - ・新聞社作成のワークシート活用
 - ・学年（学級）新聞の作成、掲示
- これらの肯定的な意見や様々な活用方法のアイデアをもらうことができた。

3. 実践前後の変化、今後の課題

①どのように変わったか

初めは、新聞が苦手・読みにくいと言い授業で新聞が出てくると苦手な顔をし、読む姿勢にならない生徒が多かったが、繰り返し学習で活用したことで抵抗感が低下した。授業で新聞を提示すると課題に沿った記事を自ら探したり、関連する記事や他で知ったニュースの話をしたようになるようになった。インターネットで自分の興味関心のあることを調べるのは異なり、様々な社会の出来事に触れることの楽しさを伝えることができた。また記事の内容が読み取れない生徒も写真から内容を想像したり、分からないことを自分で調べたりする姿も見られた。思い込みで話をしてしまうことや自分の気持ちを譲ることができない生徒も根拠をもって意見を伝えることを意識すると、主観的な意見ではなく「記事に〇〇と書いてある」や「〇〇とは限らない」など少しずつ俯瞰的に物事を見ることもできるようになってきた。難しい漢字や言葉が多いことから記事を理解することが難しい生徒もいたが、分からないことは自ら聞いたり調べたりする姿勢が見られるようになったことが一番の成長だと感じる。中学校から進学してきた生徒の中には、それまでの成育歴で様々な困難があったと想像できるが、自ら聞く・自ら調べるといった主体性を発揮できる力は、これまでになかった姿である。NIE教育を含めた

教育活動全般で培うことができたと感じる

②知的障害特別支援学校でのNIEについて

先述のとおり、知的障害をもつ生徒が新聞に触れ、社会の出来事に関心を持つことができたことや、新聞から情報を提示することで説得力のある情報提示ができるなどの新聞活用の有効性を感じることができた。学習後の生徒の感想で新聞を活用してよかったことは「世界の様々なことを知ることができる。」といったことが挙げられた。その一方で「文章を読み取るのが大変でした。」「記事の意味が分からなかった。」といった読み取りの困難さを感じる生徒が多かった。

今回のターゲットグループの生徒の学習段階は、概ね小学校3・4年生程度であるため、小中学生新聞が読みやすいと考えられる。ただし生活年齢は18歳であることを考えると、一般紙の情報を提示したい。このギャップに学習の取り組みにくさを感じた。それぞれの良さを取り入れたユニバーサル新聞があることでより知ることの楽しさを感じながら学習できると考える。

静岡県N I E 推進協議会 実践指定校一覧

- 2000年度 熱海高、磐田・城山中、静岡西高、静岡聾学校、天竜・下阿多古中、静岡・長田南小、浜松・東小、三島・佐野小、掛川・桜木小
- 2001年度 静岡西高、静岡聾学校、天竜・下阿多古中、静岡・長田南小、浜松・東小、三島・佐野小、掛川・桜木小、長泉高、小山・北郷中、浅羽中
- 2002年度 長泉高、小山・北郷中、浅羽中、静岡城北高、磐田南高、浜松城北工業高、静岡中央高、焼津中、湖西中、静岡・富士見小、熱海・初島小、浜北・大平小
- 2003年度 静岡城北高、磐田南高、浜松城北工業高、静岡中央高、焼津中、湖西中、静岡・富士見小、熱海・初島小、浜北・大平小、天竜養護学校、加藤学園暁秀中・高、浜松・江南中
- 2004年度 天竜養護学校、加藤学園暁秀中・高、浜松・江南中、沼津城北高、静岡サレジオ高、城南静岡高・中、浜松・天竜中、韮山中、磐田東中・高、富士宮・大富士小、大井川東小、掛川・日坂小
- 2005年度 沼津城北高、静岡サレジオ高、城南静岡高・中、浜松・天竜中、韮山中、磐田東中・高、富士宮・大富士小、大井川東小、掛川・日坂小、湖西高、沼津高中等部、岡部中、浜松・芳川北小
- 2006年度 湖西高、沼津高中等部、岡部中、浜松・芳川北小、清水西高、日大三島高・中、東海大付属翔洋高、西部養護学校、磐田・一中、浜松日体中・高、静岡・長田北小、浜松・竜禅寺小、牧之原小
- 2007年度 清水西高、日大三島高・中、東海大付属翔洋高、西部養護学校、磐田・一中、浜松日体中・高、静岡・長田北小、浜松・竜禅寺小、牧之原小、不二聖心女子学院、沼津・静浦中、静岡・安東小、浜松・豊岡小、御前崎・一小
- 2008年度 東海大付属翔洋高、不二聖心女子学院、沼津・静浦中、静岡・安東小、浜松・豊岡小、御前崎・一小、大井川高、浜松・雄踏中、磐田・豊田南中、御前崎・浜岡中、静大付属静岡中、静岡・清水小河内小、三島・徳倉小、清水町立南小
- 2009年度 浜松・豊岡小、御前崎・一小、大井川高、浜松・雄踏中、磐田・豊田南中、御前崎・浜岡中、静大付属静岡中、静岡・清水小河内小、三島・徳倉小、清水町立南小、川根高、浜松江之島高、富士・吉原三中、浜松学芸中・高、静岡・大里西小
- 2010年度 御前崎・浜岡中、静大付属静岡中、川根高、浜松江之島高、富士・吉原三中、浜松学芸中・高、静岡・大里西小、常葉学園中・高、下田東中、島田・金谷中、袋井中、静岡・東源台小、浜松・与進小、東伊豆・稲取小
- 2011年度 浜松江之島高、浜松学芸中・高、常葉学園中・高、下田東中、島田・金谷中、袋井中、静岡・東源台小、浜松・与進小、東伊豆・稲取小、島田高、島田樟誠高、静岡・清水五中、浜松・北部中、御殿場・南中、磐田・神明中
- 2012年度 常葉学園中・高、島田・金谷中、磐田・神明中、静岡・東源台小、浜松・有玉小、島田高、島田樟誠高、静岡・清水五中、浜松・北部中、御殿場・南中、富士宮東高、掛川工業高、浜松・三ヶ日中、焼津・大村中、静岡・安西小、静岡・城北小、沼津・原小、静岡サレジオ小

- 2013年度 富士宮東高、掛川工業高、浜松・三ヶ日中、焼津・大村中、静岡・安西小、静岡・城北小、沼津・原小、静岡サレジオ小、金谷高、浜松城北工業高、静岡・高松中、浜松・積志中、裾野・深良中、島田高、常葉学園中・高、島田・金谷中、静岡・東源台小、浜松・有玉小
- 2014年度 金谷高、浜松城北工業高、静岡・高松中、浜松・積志中、裾野・深良中、裾野高、駿河総合高、島田商業高、静岡・清水興津中、南伊豆・南伊豆中、静岡・清水三保第一小、浜松・平山小、富士・田子浦小、島田・川根小、浜松・三ヶ日中、焼津・大村中、静岡・安西小、浜松・有玉小
- 2015年度 裾野高、駿河総合高、島田商業高、静岡・清水興津中、南伊豆・南伊豆中、静岡・清水三保第一小、浜松・平山小、富士・田子浦小、島田・川根小、東海大付属小、金谷高、静岡・高松中、浜松・積志中、裾野・深良中
- 2016年度 駿河総合高、島田商業高、静岡・清水興津中、南伊豆・南伊豆中、富士・田子浦小、東海大静岡翔洋小、三島南高、静岡聖光学院中・高、浜松・可美中、裾野・富岡中、静岡・井宮小、富士宮・上井出小、森小
- 2017年度 東海大付属翔洋小、三島南高、静岡聖光学院中・高、浜松・可美中、裾野・富岡中、静岡・井宮小、富士宮・上井出小、森小、遠江総合高、静岡・観山中、本川根中、富士宮・西富士中、浜松・西都台小、静岡聴覚特別支援学校
- 2018年度 三島南高、静岡聖光学院中・高、富士宮・上井出小、静岡・井宮小、遠江総合高、富士宮・西富士中、静岡・観山中、本川根中、浜松・西都台小、静岡聴覚特別支援学校、清水西高、菊川西中、西伊豆・田子小、静岡・清水飯田小
- 2019年度 富士宮・西富士中、本川根中、静岡聴覚特別支援学校、清水西高、菊川西中、西伊豆・田子小、静岡・清水飯田小、浜松西高、常葉大附属橘高、小山中、伊豆の国・韮山南小、吉田・自彊小、湖西・白須賀小、浜松・城北小
- 2020年度 西伊豆・田子小、伊豆の国・韮山南小、静岡・清水飯田小、吉田・自彊小、浜松・城北小、湖西・白須賀小、三島・南中、小山中、静岡・大河内小中、掛川・桜が丘中、清水西高、常葉大学附属橘高、浜松西高、清水特別支援学校
- 2021年度 浜松・城北小、小山中、三島・南中、静岡・大河内小中、掛川・桜が丘中、清水特別支援学校、河津・南小、静岡・中島小、牧之原・萩間小、浜松・上島小、静岡大成中・高、浜松学芸中・高、御殿場南高、藤枝東高

静岡県N I E推進協議会

〒422-8033

静岡市駿河区登呂3丁目1番1号

(静岡新聞社内)

TEL 054-284-9152

FAX 054-284-9362